至高の11人が行く

鬼姫黒百合

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

モモンガさんを含め至高の御方々の１０人で転移します

オリ主は女の子です

もう一人プラスして、ダークソウルのオリ主　至高はオーバーロード第1期の１１ぐらいに出てきます

目次

1話 …… 1
2話 …… 5
3話 …… 11
4話 …… 16
5話 …… 20
6話 …… 24
7話 …… 29
8話 …… 33
9話 …… 48
10話 …… 51
11話 …… 55
12話 …… 61
13話 …… 65
14話 …… 69
15話 …… 73
16話 …… 78
17話 …… 84
18話 …… 90
19話 …… 95
20話 …… 102
21話 …… 110
22話 …… 117
23話 …… 125

1話

ー玉座の間ー

ユグドラシル最後に集まろうとギルメンにメールを送ったら

９人も来てくれた

２３；４０

来てくれた仲間に黄金期の装備を返して装備してもらった

２３；５５

モ「お久しぶりです皆さん」

たっ「お久しぶりですモモンガさん」

ウ「タブラさんなんでもアルベドにワールドアイテム〈世界級アイテム〉を持たせてるんですか？」

タ「いやー」

炎「設定見ましたが最後のビッチはないですよ」

武「変えた方がいいだろ」

タ「では変えます」

とタブラはビッチからギルメンを愛しているに変更した
へ「あれもぉ23時ですか……ヤバいなぁ最近時間感覚が狂ってる…」
茶「流石ブラックですね」
ペ「姉ちゃんそれ言っちゃ駄目だろ」
たっ「それよりセバス達の配置場所はここではないはず」
ゆ「あっ!!!もぉ0時になりますよ!!!」
モ「皆さんまた会いましょう!!」
ギルメン『はい、ギルマス』
その時一瞬暗くなったが場所はナザリックの玉座の間に彼らはいた
モ（チャットもGMコールもログアウトも出来ない一体どうなっているんだ!!）
モモンガは玉座から立ち上がると
？「いかがなされましたか？モモンガ様」
ギルメン（（はぁ!!!））
と声がした方を見るとそこにはアルベドがいた
ゆ「えっとGMコールが利かないんだけど」
ア「申し訳ございません!!!無知な私ではGMコールと言うものにお答え出来ません!!!
どうかどうかお許しを!!」

ゆ「許します……ねぇタブラさん」
タ「はい」
たっ〔あれメッセージ〔伝言〕は使えますね〕
武〔とにかく外でも見るか？〕
炎〔外の情報も必要ですし〕
モ「セバス」
セ「はっ!!」
モ「ナザリックを出て周辺地理を確認せよ、もし知的生物がいるなら友好的に接しろ戦闘も避けろ」
セ「畏まりました直ちに行動します」
モ「プレアデス〔六連星〕よ、これから第九階層に上がり八階層からの侵入者が来ないか警戒にあたれ」
ユ「承知いたしました。モモンガ様」
モ「アルベドよ、第四第八を除く階層守護者を第六階層の円形闘技場に集めろ」
ア「はっ!!!」
とアルベドも玉座の間から出て行った
ペ「いやー魔王ロールですねモモンガさん」

炎「完全に魔王感を出していましたよ」
たっ「コマンドを用いないことをセバス達は理解してますね」
武「自分の意思をもってるもしかしてコキュートスもか」
ウ「デミウルゴスもそうだろうな」
ゆ「私、指輪を使わず隙間で行きます」
それに全員が一緒に行くと言った
モ「ではゆかりさんの隙間で行きましょう」
ゆ「はいギルマス開け」
とゆかりが言ったらゆかりの右側に隙間が現れた
そこにモモンガ達は入って行った

2話

ー隙間の中ー

ゆ「目の模様の床うん凄いな」

へ「凄いですねぇ、この夜空」

ウ「確かブルー・プラネットさんと協力して作ったんだろ」

ゆ「はい、資料と言う夜空の資料を見つつブルー・プラネットさんと作ったんですよ」

たっ「それにしても、あの巨大な傘に大きめなソファーこれも原作であったのですか？」

ペ「俺も東方を見たけどオープニングとかにあったなぁ」

ゆ「居るよね……藍ー!!橙ー!!」

藍＆橙『はい、ゆかり様!!』

九尾と猫又が現れた

モ「ゆかりさんが作ったＮＰＣですね」

ゆ「藍は１００レベで橙は９０レベですよ装備も二人に合うのを使ってます」

タ「ゆかりさんそろそろ円形闘技場に繋げてください」

モ「初めは俺だけで行きますね俺が合図したらゆかりさんまた隙間を開いて入ってきてください」
ゆ「分かりました。円形闘技場へ開け」
ゆかりは言うと隙間が現れた
ゆ「私達が入る時に藍、橙も付いてきて」
橙「分かりましたにゃゆかり様」
藍「かしこまりました。ゆかり様」
ー円形闘技場ー
？「とぉ!!」
貴賓席から飛び降りてバッチリ決め手着地したダークエルフがいた
？「ぶい!!」
モ「アウラか」
凄いスピードでモモンガの元へ来たアウラ
ア「いらっしゃいませ。モモンガ様私達の守護階層までようこそ」
モ「…」
ア「マーレ!!モモンガ様に失礼でしょさっさと飛び降りなさいよ!!」
マ「む、無理だよお姉ちゃん」

ア「マーレ!!!」
マ「わ、分かったよぉえ、えい!!!」
とマーレが降りてきて可愛い走り方でモモンガの元へ来た
マ「お待たせしましたモモンガ様」
その後モモンガは魔法の実験をした
モ〔魔法も使えますよ〕
ウ〔おお、楽しみだ〕
その後
他の階層守護者が集まってきた
モ「さて守護者達よお前達に会って欲しい者達がいる出てきてくれ」
モ〈今です〉
とモモンガが合図したらモモンガの後ろ側に隙間が現れた
ペ「シャルティア…寂しいさせてすまない」
とペロロンチーノが隙間から出てきてモモンガの左側に立った
シャ「ペ、ペロロンチーノ様!!!!」
次に
へ「皆、久し振りですね」

ヘロヘロが隙間から現れモモンガの右側に立った
デ「ヘロヘロ様!!!」
次に
武「コキュートス元気にしてたか？」
炎「久し振り」
武人建御雷と弐式炎雷が隙間から現れた
コ「武人建御雷様!!!!弐式炎雷様!!!!」
建御雷はヘロヘロの右側、弐式はペロロンチーノの左側に立った
次に
茶「久し振りだねアウラ、マーレ」
ぶくぶく茶釜が隙間から現れた
ア&マ『ぶくぶく茶釜様!!!!』
茶釜は弐式の左側に立った
次に
ウ「久し振りだなデミウルゴス」
ウルベルトが隙間から現れた
デ「ウルベルト様!!!!」

ウルベルトは建御雷の右側に立った
次に
タ「久し振りですね」
タブラが隙間から現れた
アル「タブラ様!!!」
タブラはウルベルトの右側に立った
次に
たっ「久し振りです」
たっちが隙間から現れた
ア「たっち・みー様!!」
たっちは茶釜の左側に立った
最後に
ゆ「お久し振りですね」
ゆかりが隙間から現れた後ろには藍と橙がいる
マ「ゆかり様!!」
ゆ「閉まりなさい」
と隙間が閉じた

藍「ゆかり様、傘をお持ちします」
ゆ「有り難う藍、お願いするわ」
とゆかりは持っていた傘を藍に渡した

3話

ー円形闘技場ー

アル「では忠誠の儀を」

シャ「第1第2第3階層守護者、シャルティア・ブラッドフォールン御身の前に」

一歩前に出て左手を胸に当てて右の膝を付けてひれ伏した

コ「第5階層守護者、コキュートス御身ノ前ニ」

一歩前に出て左手を胸に当てて右の膝を付けてひれ伏した

ア「第6階層守護者、アウラ・ベラ・フィオーラ御身の前に」

一歩前に出て左手を胸に当てて右の膝を付けてひれ伏した

マ「お、同じく第6階層守護者、マーレ・ベロ・フィオーレお、御身の前に」

一歩前に出て左手を胸に当てて右の膝を付けてひれ伏した

デ「第7階層守護者、デミウルゴス御身の前に」

一歩前に出て左手を胸に当てて右の膝を付けてひれ伏した

アル「守護統括、アルベルト御身の前に第4階層守護、ガルガンチィアおよび第8階層守護、ヴィクティムを除き階層守護御身の前に平伏し奉るご命令を至高なる御身よ我

らの忠義を御身に捧げます」
一歩前に出て左手を胸に当てて右の膝を付けてひれ伏し
アル「至高なる御身よ我らにご命令を」
彼等の瞳は嘘など言ってないようにモモンガ達にはそう見えた
モ「各守護者よ各階層の警備レベルを一段階上げろ侵入者がいた場合は殺さずに捕らえろデミウルゴス及びアルベドには第十階層まで含めた警備体制の見直しを命ずる」
アル「畏まりました」
モ「アウラとマーレだが…ナザリック地下大墳墓の隠蔽は可能か？」
マ「た…例えば壁に土をかけて隠す…とかですか？」
茶〔マーレ可愛いよぉ!!!〕
ペ〔姉貴…落ち着け〕
ギルメン〔〔あんたは言えないだろ〕〕
モ「マーレの手が妙案だ周辺にもダミーの丘を作り目立たぬようにせよ」
マ「はい!!」
この後　守護者達全員に自分達の事を聞きました
モ「お前達の忠義は分かった今後とも忠義にはげめ」
ゆ「紹介しておくわ、私の隙間空間の守護を任せた領域守護者の藍と橙よ。藍は１０

０レベ橙は９０レベル仲良くしてあげて藍、橙　私達は隙間に戻るけど貴方達はここに残って階層守護達と交流して」

藍「かしこまりました、ゆかり様」

橙「かしこまりましたにゃ、ゆかり様」

藍「ゆかり様」

ゆ「傘ね有り難う…さて開け」

巨大な隙間が現れてそこにモモンガ達は入って行った

藍「初めまして守護統括様、階層守護者の皆様。先程ゆかり様にご紹介してもらいましたが私は隙間空間の領域守護を任された藍に」

橙「橙ですにゃ更に藍様はゆかり様の秘書も任されてるにゃ」

シャ「よろしくでありんす」

ア「猫耳触らせて!!」

橙「どうぞですにゃ」

ア「うわぁもふもふ」

藍「…分かりました。橙　後でゆかり様が円形闘技場か第８階層で弾幕ごっこをすると仰有ったわ」

橙「分かりましたにゃ」
アル「それよりこれからの計画を」
ー隙間空間内ー
ギルメン『あいつらマジだ…』
ペ「シャルティア声も可愛いかった!!あんな事やこんな事をやりたい」
茶「黙れクソ弟」
ペ「すみません」
武「コキュートスも俺が思った通りの性格や喋り方だった」
ウ「デミウルゴスもそうだった」
茶「アウラとマーレが可愛いかった」
弐「それより俺達もモモンガさんと同じようにキャラは作っといた方がいいよな」
たっ「それがいいですね」
へ「俺達が作ったメイド達も後で見に行こうかな」
タ「私は大図書館に行きますね」
ゆ「後で私、橙や藍と弾幕ごっこをするんですよ第8階層を使っていいですかモモンガさん?」
モ「ええ、どおぞ」

ウ「せっかくですから俺達も見ますか？」
とウルベルトが提案した
全員でそれを見ることになった

4話

ー円形闘技場ー

アル「…とするわね」

藍「分かりました。我々もそお動きます」

その時、隙間が現れた

デ「藍これは魔法なのかい？ゲート〔転移門〕と似ているが」

藍「いえ、これはゆかり様の境界を操る能力です。ＭＰを消費しない変わりにゆかり様の体力を使います。

ゲート〔転移門〕とは違い一度隙間空間と呼ばれる異空間に入りその後、向かう先に隙間を開いてもらう必要があります

その点でゲート〔転移門〕とは違います」

デ「成る程そうですか」

セバスやプレアデス〔六連星〕達も到着した

橙「…分かりましたにゃゆかり様…藍様、至高の御方々の皆様が弾幕ごっこを見にこられると事ですにゃ」

守護者&セ&プレ『!!!
アル「ねぇ藍、私達も行ってもいいかしら?」
藍「少々お待ちをアルベド様……はい、ゆかり様の御許可が降りたので隙間にお入り下さい守護統括様、守護の皆様、セバス様、プレアデス〔六連星〕の皆様」
橙「どうぞですにゃ」
アルベド達は隙間に入って行った
アルベド達が今後の計画を考えてた時
モモンガ達は今後の事を話し合っていた
モ「ここが異世界と言う可能性が高いですね」
武「まぁそうだろうな」
モ「……皆さん、元の世界に戻りたいですか?俺にはあっちの世界で友達や家族が居なくてユグドラシルが俺の全てだったんですよ。
だから元の世界に戻る方法があっても俺は戻りませんＮＰＣ達とナザリックに戻ります」
そう言ったら
ウ「俺もあの世界に戻るより此方で楽しくやれる方がいいからな俺も残る」
タ「それなら私もですね。元の世界では嫌な事しかありませんからね」

ペ「俺もこっちで残りますシャルティアもいるし」
茶「私も残りますよ」
武「絶対こっちの方が楽しいからな俺も残る」
炎「ナーベラルもいるし俺も残る」
ヘ「社畜より此方で生きる!!」
モ「ヘロヘロさん落ち着いてください」
ゆ「私も残りますよあんな生活もぉ二度と嫌だからたっちさんはどうしますか?」
たっ「私も残ります家内は病気で死んでしまいましたし娘も結婚して家から旦那さんの家に行きましたから」
全員残ると言うことになった
ゆ「んっ……あのモモンガさんアルベド達も弾幕ごっこを見たいと言ってきたんですが」
モ「いいですよ」
ゆ「ありがとございます……ふぅ先に皆さんは行っててください第8階層へ開け」
たっ「分かりました」
ゆかりは隙間を出すとモモンガ達はそれに入って行った全員移動したのを確認する

と

ゆ「閉まれ、円形闘技場へ開け」

とまた隙間を作ると

藍や橙、守護達やセバス、プレアデス〔六連星〕達が現れた

5話

ー隙間空間ー
ゆ「ようこそ私の空間へ、さて……第8階層へ開け…ここを通ってね」
ＮＰＣ『はっ!!』
とゆかりが作った隙間にＮＰＣは入って行った
ー第8階層ー
ギルメン（(プレアデス〔六連星〕もか)）
準備が出来てから
モ「ゆかりさん始めてくれ」
ゆ「ええ分かりましたわギルマス…藍かかってきなさい」
藍「はい、ゆかり様」
と藍は大量のクナイ弾を飛ばしてきた
ゆ「ふふ」
ゆかりは簡単に交わした
ゆ「それ」

ゆかりは藍より大量のクナイ弾を飛ばした
シャ「綺麗でありんすね」
アル「ええ、そうわね」
橙「流石、ゆかり様に藍様にゃ」
ゆ「スペルカードを使って来なさい」
藍「はっ!!式神『十二神将の宴』」
様々な方向からウロコ弾がゆっくり飛んできた
ゆかりは傘からレーザー弾を出してウロコ弾全てを消した
ナ「魔法なのですか？」
弐「ＭＰを消費するからどれも魔法攻撃の分類にはいるな」
ゆ「私もスペルカードを使うわ結界『夢と現の呪』」
大量のウロコ弾に大量の追撃弾が出てきた
藍「流石ゆかり様です」
ゆ「そお？弾幕ごっこはこらぐらいにしておきましょう、あっそうだわ誰か少し特殊なのだけれどある武器を使ってほしいの？槍とか剣とか色々あるわ」
そこで手が上がったのがここにいる全ＮＰＣ達だった
ゆ「それほど数がないから全員は無理だわまずはシャルティアとコキュートス」

シャ「指名してもらって光栄でありんす」
コ「有り難キオ言葉」
ゆ「コキュートスには楼観剣と白楼剣をシャルティアにはレーバテインとスピア・ザ・グングニルを」
私はアイテムボックスから武器を取り出し二人に渡した
その後も色々と武器を渡してどんな効果か試してみたら
まぁまぁ効果があった
ゆ「けっこう効果があるみたいね」
茶「モモンガさんこの後はどうします？」
モ「各自の仕事に戻れ」
ＮＰＣ『はっ!!!』
ＮＰＣ達は直ぐに各自の仕事に戻った
モ「俺の書斎でこれから何をするか話しますか？」
ギルメン『賛成』
たっ「今度はリングを使って転移しましょう」
ペロ「アイテムも使えるか確かめないといけないからですね」
たっ「はい」

その瞬間、全員　リング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを使いモモンガの書斎まで転移した

ーモモンガの書斎ー

モモンガの書斎で彼等はこれからについて話しあった

ウル「まず、情報収集をした方がいいだろ俺達はこの世界をよく知らないからな」

ヘロ「もし、この世界に人とかモンスターが俺達より強かったらどうします?」

武「ワールドアイテム〔世界級アイテム〕を使うしかないだろ」

モ「ともかくまずは情報収集ですね」

6話

夜にこっそり外に出ていたモモンガさん
セバスとたっち・みーに叱られるのを見て他のギルメンは
ギルメン『モモンガさんドンマイ!!!』
としか言えなかった
次の日ギルメン全員でセバスと一緒にミラー・オブ・リモート・ビューイングで外を見ていた
モ「んっ？祭りか？」
茶「これは殺戮ですね」
ウ「関係ないだろ」
モ〔俺達、心まで人ではなく異形種になってますね〕
炎〔助けますか？この村？〕
たっ〔助けるのが当たり前助けに行きましょう!!!〕
ペ〔この子可愛いから行きましょう!!〕
茶〔黙れくそ弟〕

ゆ〔ナザリックの警備レベルを上げといた方がいいですね〕
ペ「セバス、ナザリックの警備レベルを最大に引き上げてくれ」
タ「アルベドに完全装備で来るように伝えてください」
武「俺達は先に行ってるぞ」
モ「ゲート」
モモンガの前に黒い空間が表れて彼等は入って行った
次に見えたのは姉妹が今殺されそうになった瞬間だ
モ「ブラストハート〔心臓掌握〕」
モモンガの手に心臓のような物が表れてモモンガがそれを握り潰すと兵士は死んだ
武「弱いな、こんなので死ぬのかよ」
兵士「ひっ!!!」
ウ「こいつは俺がファイアーボール〔火球〕」
ギルメン（（流石にそれは軽いダメージだろ））
兵士「ぐぁぁあ!!!」
真っ黒になって死んだ
ギルメン『弱すぎだろ…』
ウ「殺した事に俺は喜んでるのか…ふふふふ」

ペ「この子達が驚いてるぞ」
モ「中位アンデッド作成デス・ナイト〔死の騎士〕」
デス・ナイト〔死の騎士〕が作られてる途中
ギルメン（（異世界じゃこんな風になるのか…））
モ「行けデス・ナイト〔死の騎士〕この村を襲っている兵士を殺せ…」
アル「準備に時間がかかり申し訳ありませんでした…その生きている下等生物の処分はどうなさいますか？」
ギルメン（（人間の地位低すぎだろ））
アル「お手が汚れるというのであれば私が代わりに行いますが」
たっ「いや、アルベドこの村を救います」
モ「これを…」
？「の…飲みます!!だから妹には手を―」
？「お姉ちゃん!!!」
アル「温情により下賜された薬を受け取らないとは…その罪万死に値する」
アルベドが殺気を出した
ゆ「落ち着いてアルベド…この薬はね治癒の薬だから安心して」
姉妹の姉はポーションを飲んだ

ゆ〔私が一番人形だから安心したんですか？〕
炎〔多分そうですね〕
ゆ「痛みは引きましたか？」
？「はっはい!!!」
ウ「君達は魔法と言うものを知っているか？」
？「はっはい私の知り合いの薬師の私の友人が魔法を使えます」
モ「私はマジックキャスター〔魔法詠唱者〕だ」
モモンガは中位の防御魔法を姉妹の回りにはった
モ「守りの魔法をかけてやったそこにいれば大抵安全だ」
ゆ「これもあげますねこれを吹くと十数のゴブリンがあらわれて守ってくれます。ちなみに片方は効果を2倍にしていますから」
？「あ…ありがとうございます!!!あの…お名前はなんと…」
モ「我が名を知るがよい我が名はアインズ・ウール・ゴウン」

姉妹から離れた後
へ「モモンガさん何でギルド名を名乗たんですか？」
モ「もしかしたら他の仲間が居るかも知れないからだ長いので呼ぶのはアインズでよ

い」
タ「それより私達の姿をどうしますか?」
ゆかりやたっちを除いてギルメンは人の姿ではないので先程の姉妹と同様他の人にも怯えられそうだ
ウ「幻術をかければ大丈夫だろ」
ウルベルトは魔法でゆかりとたっちとアルベドを除く者と己に幻術をかけ人の姿になった
武「これで大丈夫だろ」
炎「俺が先に見てきますね」
茶「お願いします」
弐式炎雷はそう言うと一瞬で姿を消した

7話

炎〔モモンガさん、デス・ナイト〔死の騎士〕が凄い勢いで兵士達を殺していますよ〕
アイ〔マジか……あっ、もぉすぐ着きます〕
ついた
デス・ナイトが兵士達を容赦なく殺していた
アイ「デス・ナイト〔死の騎士〕そこまでだ…」
兵士で生き残った者はいなかった
アインズ達は自分達の事を遠く離れた異国から来たここら辺の情報を知らないマジックキャスター〔魔法詠唱者〕とその仲間達だと説明したら信じてもらえた
今、私達は村長の家でこの地域の事を説明してもらっている
ここカルネ村やナザリックはリ・エスティーゼ王国がある山脈をはさみ反対側にはバハルス帝国があり南側にはスレイン法国がある
村長「村から一番近い都市はエ・ランテルですこの辺りにはゴブリンやオークなどがいますが冒険者達が巡回しているので街道沿いを行けば安全です」
たっ「冒険者…」

村長「報酬次第でモンスターを退治する者達です
エ・ランテルには彼等にあっせんして仕事を与える冒険者組合があるんですよ」
アイ「そうですか」（やはり、町にでも行って暮らす必要があるか…）
アインズ達は村村人達が死者の追悼をしているのを見ていた
アイ「このワンド・オブ・リザレクションがあれば村の死者を復活させる事が出来るが
死を与えるマジックキャスター〔魔法詠唱者〕と死者を蘇られる事が出来るマジックキャスター〔魔法詠唱者〕どちらが厄介事に巻き込まれる可能性が高いのか想像にかたくない
状況が変化すれば別だが今は村を救ってやったことで満足してもらおう」
そしてアインズ達は村の中を歩いていた
アイ〔これでアインズ・ウール・ゴウンと言う人物がこの村人を救ったと言う情報は広まりますね〕
ヘ〔ユグドラシルのプレイヤーが我々の名を知り敵対するか友好的になってくれるかですね〕
たっ〔友好的であって欲しいと願うしかないですね〕
ペ〔あいつらの反感をかわないように不必要な殺戮はやめた方がいいですね〕

ウ〔だろうな〕
村人達が騒いでいた
アル「至高の御方々様　正体不明の下等生物の人間達が馬に乗って村に向かってきております」
ウ「シャドウ・デーモン〔影の悪魔〕達でも配置してるのか？」
アル「はい、更にアウラ、コキュートスが中心に軍隊を作り村の近くで控えいますご命令とあらば
直ぐ様殲滅いたします」
炎〔いつの間に軍をそろえたんだよ……〕
タ〔ですね〕
茶〔アウラ……てっことは魔獣中心だね〕
武〔コキュートスかなら蟲系統だな〕
ゆ〔で　どうしますか？〕
アイ「いや、軍を動かすな１０体　シャドウ・デーモン〔影の悪魔〕を寄越せ残りの軍は全て引かせろ」
アル「畏まりました」
アルベドにそう指示した後

ガゼフ・ストロノーフ達が来た　そしてこの村を救った事に感謝され
そしてこの村　に何者かが来ており　そいつらは天使を連れていた
ガゼフは自分達でかたずけるといいそいつらの元へ向かった

8話

話はガゼフとアインズ達が入れ換わったところから始まる
ウ〔戦騎手長の武技はとても気になるな〕
ニグン「何者だ？」
アイ「初めましてスレイン法国の皆さん私はアインズ・ウール・ゴウン、アインズと呼んでいただくと幸いです」
タ〔いい実験が出来そうですね〕
武〔俺も武器の威力を試したいんだが〕
たっ〔私達も偽名を使いますか？〕
アイ〔名案ですたっちさん　まぁ名前を短くするだけでいいですか？〕
ペ〔それでいいですよモモンガさんいやアインズさん？〕
アイ〔皆さんはモモンガでいいですよ　すみませんヘロヘロさんだけはそのままで〕
ヘ〔はい、大丈夫です〕
アイ〔ありがとございます〕「そして後ろにいるのが私の友のたっち、ウルベルト、ペロン、茶釜、ヘロヘロ、タブラ、建御雷、弐式、ゆかり　そしてアルベドだ」

炎〔ゆかりさん　気に入った奴はいますか？〕
ゆ〔あのリーダーらしき男が気に入りました　能力はそのままに若くもしくは整形してから　僕にかえます〕
ギルメインーゆかり
〔〔〔〔〔〔〔〔了解です〕〕〕〕〕〕〕〕
アイ「あの村とは少々縁がありましてね…」
ニ「村人の命乞いにでも来たのか？」
アイ「いえいえ、実はお前と戦士長の会話を聞いていたのだが本当にいい度胸をしている」
ニ「はっ？」
アイ「お前達がこの私が手間をかけてまでも助けた村人を殺すと公言していたな、これ程不快な物があるものか」
ニ「不快とは大きく出たなマジックキャスター〔魔法詠唱者〕でっだから、どうした？」
アイ「抵抗することなく、その命を差し出せ　そうすれば痛みは無いだが、拒絶するなら愚劣さの対価として、絶望と苦痛の中で死に絶えるだろう」
タ「アインズさん　私もやらせてもらいますよ私のいい実験材料になるのですから」

武「タブラさん　俺もあいつらで、この刀の試し切りをしたいんだが」
炎「俺も暗器の的が欲しいんだがな」
ペ「あー俺も動く弓矢の的が欲しいな」
ウ「それなら天使にでもやればいいだろ、俺は人の悲鳴が聞きたいんだがな」
茶「男だしアレは無理だし私は手を出さないよ」
へ「茶釜さん（^＿^；）……僕も手は出しませんよアインズさん」
ゆ「あのニグンだけは残して欲しいわ　後で私が貰うから…ふふ」
たっち「さて正義　執行だな」
ギルメン（((たっちさんの性格も少し変わってる？)))）
ニ「天使達を突撃させよ!!」
天使2匹が飛んできてアインズの腹を刺した
ニ「無様なものだ下らんはったりで煙まこうと…」
ニグンの言葉は何故かもがいている天使2匹の行動によって止まったしまった
アイ「言っただろ？抵抗することなく命を差し出せと
人の忠告は素直に受け入れるべきだぞ？」
「ばかな」
「何かのトリックに決まっている!!」

アイ「上位物理無効化…データ量が少ないまたは低位の武器の攻撃を完全に無効化にするバッシブスキル〔常時発動型特殊技術〕なんだが……はぁ!!!」

アインズは天使2匹を地面に叩きつけて倒し天使や天使が持っていた武器は光の粒子となり消えた

アイ「やはり、ユグドラシルのアークエンジェル・フレイム〔炎の上位天使〕と同じか」

ニ「っ!!」

タ「貴方達が何故ユグドラシルと同じ魔法や同じモンスターを召喚出来るのか追求心が尽きませんね」

アイ「そうだな、だがそれは、ひとまず置いておこう」

武「反撃をするかアインズ?」

アイ「ああ、行くぞ鏖殺だ」

ニ「!!全天使で攻撃を仕掛けろ!!!急げ!!!」

アイ「アルベド下がれ　皆　天使は私だけでやるいいか?」

ギルメン『承知した』

アル「はっ!!」

たっち達とアルベルトが離れた瞬間

アイ「メガティブバースト〔負の爆裂〕!!」
アインズから発せられたネガティブバースト〔負の爆裂〕によってアークエンジェル・フレイム〔炎の上位天使〕は全て消え去った
ニ「あ、あり得ない」
ニグンの部下達はこらんし
「ば、化け物!!!」
魔法攻撃をアインズ達に向かって放っているが
そんなのが効くわけもなく彼らは無傷だ
ペ「全部ユグドラシルの魔法みたいだな　なぁウルベルトさん?」
ウ「ああ、どれも低位な魔法ばっかりだ」
炎「誰から教わったんだ?」
ニ「プリンシパリティ・オブザベイション〔監視の権天使〕かかれ!!」
ニグンの声に反応し天使はメイスを取り出し此方にやって来てメイスでアインズ達を攻撃しようとしたが
建御雷が大太刀でそれを防ぎ更には天使を真っ二つにして光の粒子へと変えた
武「こんな物か」
ニ「一撃だとあり得るか!!!!上位天使がたった1つの攻撃で滅ぼされるはずがない!!」

「ニグン隊長　我々はどうすれば」
ニグンは突如　笑みを出して水晶を取り出した
ニ「最高位天使を召喚する!!!」
茶〔あれ、間違いなく魔封じの水晶ですよね〕
タ〔ユグドラシルのアイテムもあるのですね〕
へ〔最高位天使てっまさかセラフ・エイススフィア〔恒星天の熾天使〕とかですか?〕
ゆ〔明光の耳飾りを使いますか?〕
アイ〔一応何時でも召喚出来るようにしてください〕「アルベド　スキルを使い我々を守れ」
アル「はっ!!」
アルベルトは一歩前に出て防御体制になった
ニ「見よ!!!最高位天使の尊きその姿を!!!ドミニオン・オーソリティ〔威光の主天使〕」
現れたのは２０㍍もする巨体に
目の前に浮かぶ姿は純白に光り全身羽で出来ているような姿をしていた
ニグンの部下達は歓喜を上げている
ウ「んなっ!!」
タ「!!!」

炎「建やん俺の目大丈夫か？」
武「大丈夫だ、それよりマジかよ」
ゆ「えっ!!」
へ「へっ!?」
たっ「そんな馬鹿な」
ぺ「はぁ!!」
茶「はい!?」
アイ「この天使が最大の切り札」
アインズ達は完全に驚いている
ニ「そうだ!!お前らにはこの宝を使うまでの価値があると判断した」
アイ「何と言うことだ……」
ニ「恐ろしいか!?怯えるのも仕方がない」
アイ「下らん」
ニ「何!?」
ウ「期待して損したな」
タ「宝の持ち腐れですね　まさかあんなのにあれを使うとは」
炎「もっと上のランクの天使はいないのか」

武「やる気が失せるぞこれは」
ゆ「はぁ警戒するんじゃなかったわ」
へ「呆れますね」
たっ「ははは……」
ぺ「何か損したな」
茶「こいつらの頭は可笑しいの？」
アイ「この程度の幼稚なお遊びに警戒していたとは」
ニ「お遊び……？う、嘘だやれドミニオン・オーソリティ〈威光の主天使〉!!ホーリースマイト〈善なる極撃〉を放て!!!」
ドミニオン・オーソリティ〈威光の主天使〉の攻撃をアインズ達は食らってほんの少ししかダメージを受けなかった
逆にアインズは実験が成功出来て喜んでいた　そして
ニ「!!!」
アル「か!!か、下等生物がぁぁぁぁぁぁ!!!!!!!!」
ニ「ひぃ!!!!」
アル「至高の御方々様!!私達の敬愛すべき主君方であられる至高の御方々を!!!!
私の大好きなちょー愛してる御方々にいいい!!!!痛みを与えるなど!!!!ゴミである身の

程を
知れぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇーーーー!!!!!!!!!!!!!!!!
容易くは殺さぁぁぁあんんん!!!!!!!この世界で最大の苦痛を与え続けてやるぅぅううう!!!!
あああぁぁぁぁあ憎い!!!!
憎くて憎くて憎くて心が弾けそぉぉおおお!!!!!」
ギルメン（(アルベドてっこんな感じだったか!?))
ペ「ま、まぁ落ち着いてアルベド」
とペペロンチーノがアルベドの右肩に手を置いてなだめ始めた
ゆ「アインズさん後はやっていいかしら？」
アイ「ああ、どうぞゆかりさん」
ゆかりは2歩前に出ると
ゆ「本物の最高位天使を見てあげるわ　耳飾りよ天の扉の鍵となれ!!わが僕を連れて来なさい!!!!!」
ゆかりがそう言うと　ゆかりの耳に付いていた明光の耳飾りから光が出て空へと飛んでいき　空が神々しく光った
「な、何だこの神々しい光は!!!!」

ニ「何なんだ!!これは!!!!」
そして更にある所が強く光り　そこから
2㍍程の　人の形をしていて
白銀の鎧を身に纏い3対6の純白の羽を生やし　その顔は付けている仮面によって見えないが髪色は金色で腰まで伸びている
武器は七色に光る黄金の剣と雷を纏う純白の盾を持っていた
ニ「何て美しいんだ……まさに、あれが最高位天使なのか…」
ゆ「そうよ、さて潰しないわが　僕よ」
ゆかりはそう指示するとセラフ・ジ・エンピリアン〈至高天の熾天使〉はドミニオン・オーソリティ〈威光の主天使〉を簡単に破壊した
そして空にヒビが入ったて透明な何かが砕け散った
ニ「な、何だ?」
ウ「何らなの情報系魔法を使ってお前らを監視しようとした者がいたみたいだな
俺やアインズさんのこうせい防壁が起動したからたいして覗かれてないだろうな」
ニ「本国が俺を…」
ニグンは驚いた顔でそう言った
アイ「では、遊びはこれぐらいにしよう」

ニグン達はそれを聞き慌て始めた!!!!

ニ「ま、ままま待って欲しい!!アインズ・ウール・ゴウン殿いや様　私達の命を!!助けてくださるならば望む額を用意!!用意いたします!!」

アル「貴方間違ってるわ」

ニ「へっ?」

アル「人間と言う下等生物の貴方達は頭を下げ命を奪われる時を感謝しながら待つべきだったの」

ニ「下等生物…」

ゆ「まぁニグン貴方だけは人間としては死ぬけど　別の生き物として生きられるわ……多少苦しむと思うけどね」

アイ「確かこうだったな【無駄な足掻きを止めそこに大人しく横になれせめてもの情けに苦痛なく殺してやる】と」

ニグン達が叫ぶ前に彼らはナザリックの牢屋に繋がるゲート〔転移門〕に落ちていった

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

アイ〔皆さん　俺の振る舞いはナザリックの支配者として相応しかったですか?〕

たっ〔合格ですよ、モモンガさんまさに魔王でした〕

へ〔逆に僕達の方がモモンガさんの友に相応しく無かったですよ〕
ペ〔あっニグンだったけ彼奴らの拷問して情報を引き出した後どうします？〕
タ〔一部は人間を使った錬金術の実験台に欲しいのですが？それと少し人間の脳を食べてみたいです〕
武〔ブレイン・イーター〔脳食い〕だからか？〕
ゆ〔あっニグンの整形をするためにニューロニストから道具をかりないと〕
茶〔早くマーレとアウラに会いたい!!癒されたい!!〕
ペ〔あー俺もシャルティアとあんなことやこんな事を〕
ウ〔おい、茶釜さん〕
茶〔はい、おい糞弟　説教してほしいか？〕
ペ〔姉貴の説教だけはマジで勘弁してくれ!!!〕
炎〔どれだけ怖いんですか茶釜さんの説教は〕
ゆ〔私　遠くから見てたんですけど、たっちさんと同じぐらい怖かったですよ〕
へ〔マジでヤバイじゃないですか〕
たっ〔私の説教はそんなに怖いんですか？〕
ギルメン〔〔はい!!!!!!〕〕
そんなこんなの通話をやっているアインズ達を後ろからアルベドが

アル「くふふ、やっべー至高の御方々まじカッケー」
とうしろで興奮していた
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
さて場所を変えてここは
ーナザリック地下大墳墓　玉座の間ー
守護者達やアルベド、セバス、プレアデス〔六連星〕、橙、藍や彼等の直属の部下達が
集まっていた
そしてアインズ達は祭壇の上にいる
アイ「まずは、私達が個人に動いた事を詫びよう
何があったかかは、アルベドに聞くように
ただ1つの至急伝えることがあるグレーター・ブレイク・アイテム〔上位道具破壊〕」
アインズは魔法で己の旗を消し去った
アイ「私は名を変えた　これより私の名を呼ぶときはアインズ・ウール・ゴウン!!ア
インズと呼ぶがよい!!
異論ある者は立ってそれを示せ!!」
アインズは立上がりそう言った
アル「御尊名伺いましたいと尊き御方に絶対の忠誠をアインズ・ウール・ゴウン様

至高の御方々様　万歳!!」
僕『アインズ・ウール・ゴウン様　至高の御方々様　万歳!!!!』
シャ「至高の御方々に私共の全てを捧げます」
アウラ、マーレ『恐るべき力の王達よ』
デミ「この世の全ての者が御身方の偉大さを知るでしょう」
コ「全テヲ超越シ我等ガ王達ヨ」
アル「我等が支配者至高の４１人に栄光を」
アイ「お前達に言明するアインズ・ウール・ゴウンを不変の伝説にせよ!!」
そのアインズの言葉に僕達かは歓喜の声を上げる
ヘ「英雄が数多くいるなら全て塗りつぶそう!!!」
茶「地上に!!」
ペ「天空に!!」
炎「地下に!!」
武「海に!!!」
たっ「我らアインズ・ウール・ゴウンこそ大英雄だと生きとし生ける全ての者に知らしめよう!!!」
ウ「より強い者がもしこの世界にいたのなら力以外の手段を使え!!」

ゆ「数多くの部下を持つ者がいるなら別の手段を使うのよ!!」
タ「今はまだその前の準備段階ですが来るべき時のために動くのです!!」
アイ「アインズ・ウール・ゴウンこそが最も偉大なものであること言うことを知らしめるためにだ!!!」
そう言い終わるとアインズ達はリング・オブ・アインズ・ウール・ゴウンを使い玉座の間から姿を消した
アル「デミウルゴス　アインズ様とお話したさいの言葉を皆に」
デミウルゴスは立上がり
デミ「アインズ様が夜空を御覧になられた時こう仰いました。【私がこの地に来たのは仲間達と誰も手に入れてない宝石箱を手にする為かもしれない】とそして最後にこう仰いました【世界制服も面白いかもしれないな】と」
アルベド「各員ナザリック地下大墳墓の最終目的は至高の御方々に宝石箱を……この世界をお渡しすることだと知れ」
その声に僕達を声を上げ
アインズ達の知らず知らずの間に決まってしまった

9話

ー円卓の間ー

ゆかりの配下となったニグンやニューロニストの拷問によってある程度の情報を手に入れた

ここには現在　アインズ達がいた

アイ「情報は少しは集まっていますが、まだ集める必要がありますねパンドラとやナーベラルを付けて私が冒険者をエ・ランテルでやって情報を集めます」

炎「モモンガさんナーベラルも行くなら俺も行きます絶対に」

弐式が目を赤く光らせ　謎のオーラを纏いそう言った

アイ「あっ、はい分かりました」

ヘ「それなら帝国の方でも誰か冒険者をやった方がいいですよね」

タ「それなら帝国ではワーカーの方が有利です　ヘロヘロさん、御建雷さん私とワーカーをやりませんか?」

ヘ「良いですよタブラさん、護衛としてソリュシャンに付いてもらった方がいいですよね」

武「おう、やるやる」
アイ「では、帝国での情報収集はタブラさん、ヘロヘロさん、御建雷さん、ソリュシャンに任せますね」
茶「モモンガさん、私はアウラとマーレと一緒に森の探索をします　あの森　大きいですし」
ペ「じゃあ俺はシャルティアと一緒に武技集めでいいですかね？それをやります」
武「シャルティアのアレはどうするんだよ」
ギルメン『あっ』
ペ「それなら俺が何とかするんで大丈夫ですよ任せてください」
たっ「ペロロンチーノさんがそう言うなら信じましょう」
アイ「そうですね、森の探索は茶釜さんとアウラとマーレそしてペロロンチーノさんとシャルティアには武技の探索と捕獲をお願いします」
ウ「羊皮紙とかの無限に産み出せないアイテムをどうこっちの世界で賄うかだよな特に羊皮紙は
俺とデミウルゴスで探してみるか？」
ペ「デミウルゴスはナザリック、1の知恵者だから任せていいと思いますよ」
アイ「それでは、ウルベルトさんとデミウルゴスは羊皮紙の研究を頼みますね」

ウ「おう、任せろ」
ゆ「こっちの世界でのお金をどう集めます?」
炎「誰かに商人や店をやってもらってはどうですか?」
ゆ「それなら私が橙、藍、ニグンと一緒に店を開きます」
たっ「それなら、私がセバスと一緒に商人をやりましょう」
アイ「それでは、ゆかりさんに店をたっちさんに商人をやってもらいます
それではアルベド達にもこの事を伝えましょう」
とアインズは直ぐ様メッセージ〈伝言〉でアルベド達を呼び出し先程の事を伝えると
アル「なりません!!せめて精鋭部隊をお連れに!!!!」
とアルベドだけもう反対していた
デミ「アルベド」
デミウルゴスはアルベドの耳元である事を言うと
アル「至高の御方々がおらぬ間　留守はこのアルベドにお任せを!!!!」
と言い出したので
ギルメン　(((デミウルゴス　アルベドに何を言ったんだ?・)))
ギルメン達は心の中で首をかしげたのであった

10話

ーエ・ランテルー

先程　ゆかりは市役所的な所で空き家を買って

そこで店を開く事にした

僕達に荷物を入れて内装をやってもらった後

ゆかり達は幻術で変装した

ー店ー

ゆ「ここでは私の事はゆーと呼ぶようにしてね、橙はチェル、藍はライチ　ニグンはニルバーナと呼ぶように」

僕『はっ!!』

ゆ「お店の名前は香りん堂よ　ニルバーナ貴方があそこにある魔法で出来ている看板に書きなさい」

ゆかりは店の端にある看板に指を指してそう言った

ニ「はっ!!お任せを」

とニグンは看板に文字を書き始めた

ゆ「さて、香りん堂では武器の強化更に1日2回
武器を低位の魔法武具に、魔法で出来ているユグドラシルでの中級プレイヤーに役立っていたアイテムも販売するわよ」
藍「はっ!!畏まりました　ゆー様」
と藍は言うと商品の配置を始めた
橙「ゆー様　ナザリックで材料を生産出来るか確認してきましたにゃ」
ゆ「それで橙どうだったのかしら?」
橙「はい、生産出来るとの事ですにゃ」
ゆ「ご苦労様　橙さてニルバーナ」
ニ「はっ!!」
ゆ「貴方が魔法の強化をやりなさい　私の職業の能力によって強化をしたら、強化した経験値が入るわ　それでレベルを上げていくのよ　勿論夜には　ナザリックで1時間
橙との模擬戦闘をしてもらうわ　いいわね?」
ニ「承知いたしました　ゆー様」
藍「ゆー様　品物の配置が終わりました　何時でも開店は可能でございます」
ゆ「そう、では香りん堂　開店よ!!」

僕『はっ!!』
こうして香りん堂は開店した
開店してから数時間後　冒険者チームがやって来た
ゆ（あれはアイアン〔鉄〕か始めてのお客様だし開店セールで安く売った方がいいよね）「いらっしゃいませ」
冒険者「うわっ何だこのスゲー武器やアイテムは!!!!!」
ゆ「すみません私は異国の者でして　私の故郷ではこのような店はたまにありますよ」
冒険者　1「へぇーそうなのか、じゃあこの軽装備にこの剣と盾でいくらなんだ?」
ゆ「本当はお高いのですが本日　開店したばかりなので大分お安いお値段にしますね、全部で銀貨1枚に銅貨5枚です」
冒険者チーム『えええええ!!!!』
冒険者リーダー「い、いいいいいい　いいのですか!!」
ゆ「はい、本来なら合計　金貨75枚はいくのですがね
出血大サービスで皆様の装備を全て金貨1枚だけでオリハルコンの軽装備に炎や雷の効果が付いた武器をそれぞれ1つづつお渡しいたします」
冒険者チームは声にならない程の叫びを出した

ゆ「その代わり　皆様には私の店の事を広めて欲しいのです　出来るだけ街全体にさぁお客様　こんな事はなかなか訪れません、買いますか買いませんか？」
冒険者チーム『買います!!!』
冒険者チームのリーダーが私に金貨４枚を渡した
ゆ「金貨1枚で宜しいのですよ？」
冒険者リーダー「いや、受け取ってくれ!!」
と土下座で言われたので
ゆ「……はい、ライチ、チェルお客様に装備や武器を」
藍「畏まりました」
橙「畏まりましたにゃ」
橙と藍が商品をアイアン〔鉄〕冒険者チームに渡してる時に
ゆかりは売り上げの金貨を袋に入れた
ゆ「それでは宣伝をお願いします」
冒険者リーダー「任せてください!!」
冒険者チームは店を出ていって早速　街中に噂を広めた
次の日からゆかりの店には客がさっとうする事になる

11話

ゆかりが香りん堂である程度　お金を稼いでナザリックに送った後
アインズは宝物殿に行ってパンドラに説明し彼を連れてきて
アインズは魔法で出来た鎧を身に付け更に人化の指輪を装備しグレードソード2本を背に背負った
鎧の下は何時も装備している装備です
パンドラは女性の人間に変身し弓使いをやる事になった
弐式炎雷も人化の指輪を装備し
装備を幻術でアサシン用の軽装備に見せて
最上級のアイテム武器を装備した
ナーベラルはマジックキャスター〔魔法詠唱者〕に姿を変えそして
エ・ランテルに転移した
ーエ・ランテルー
転移し直ぐに冒険者組合に行き冒険者登録をし近くで見つけた宿に入って行ったら
カッパー〔銅〕だから多少嫌がらせを受けつつ部屋は確保したが嫌な感じの男らに絡

まれてしまった
男「そこにいる嬢ちゃん達に介護してもらわねぇとなぁ」
弍式は暗器を構えようとしたが
アイ〔弍式さん殺すのは駄目ですよ今からお礼は返しますが〕
炎〔モモンガさんが言うなら仕方ないですね〕
アイ「ふっふふ、いやいや許してくれ」
男「ん？」
アイ「余りにも雑魚にふさわしい態度に笑いが押さえられなかった」
炎「ふさわし過ぎるな」
男「あぁ!!」
アインズは直ぐ様　男の首もとを持ち多少かかげ
アイ「お前となら多少遊ぶ程度の力も出さないで良さそうだな」
アインズはそう言うと男を放り投げた
そしたら近くの席にいきテーブルを倒してしまった
そしたら
女「うぎゃぁーーーーー!!!!」
と女の冒険者が突如叫んだ

女「ちょっとちょっと!!ちょっと!!!ちょっと!!!!あんた何すんのよ!!!!あんたのせいで私のポーションが割れちゃったじゃない!!!弁償しなさいよ!!!!」
炎「ポーション？」
その後　少しの間
女はどうやりくりしてお金を貯めてポーションを買ったのかをブツブツと言った
女「あんたご立派な鎧を持ってるんだからポーションの1っ2っや持ってるでしょ」
ナ「!!!」
パ「!!!」
炎「ナーベやパンドラも落ち着け落ち着け」
と弐式がナーベラルを宥める
女「げんぶつでも構わないからさ」
アイ「分かった」
アインズはマイナー・ヒーリング・ポーション〔下級治癒薬〕を取り出し女こと冒険者ブリダに渡した
ブ「赤いポーション？」
アイ「これで問題はないな」
ブ「ええ、一先ずは」

アインズ達が部屋に入った後
パ「このような場所で!!モモン様や炎雷様が滞在なされる!!のですか!!?」
ナ「はい、至高の御方々にこのような場所は相応しくないかと」
アインズは人化の指輪を取り外し兜の所だけ魔法を解いて骸骨の顔をさらけ出した
弐式も人化の指輪を取り外しハーフゴーレムの姿へとなった
炎「そう言うなナーベ、パンドラ」
アイ「しかしあれが冒険者か、組合と言う組織に管理され依頼はモンスター討伐ばかりとはな」
炎「予想以上にユグドラシルと違い夢がないな」
ナ「あの不快な女はどういたしましょうか?」
パ「確かあの女はアイアン〈鉄〉の冒険者でしたね」
アイ「彼女は私達より格上の冒険者だ後輩たる者　多少は顔を立ててやろうじゃないか」
炎「ナーベ、パンドラ人間はどう思う?」
ナ「ゴミです」
パ「我等が主達の踏み台です!!!!」
炎「そ、そうか」

アイ「ナーベ、パンドラよ、その考え方を否定しないが敵対関係を作らないようにそのような行動はつつしめ」
ナ&パ『畏まりましたアインズ様』
アイ「この街にいる間は私の事をモモンと呼べと言ったはずだぞ、そしてお前たちは我々の仲間のナーベ、パンドラだ」
炎「様付けもやめるように」
ナ「はい、モモンさーん炎雷さーん」
パ「はい!!モモンさ、さっん炎雷さ、さっん」
炎〔これはさん呼びは無理だと思いますよモモンガさん〕
アイ〔そうですよね弐式さん〕
炎「今後の行動方針は」
アイ「まず我々はこの街で著名な冒険者としてのアンダーカバーを作り出すその主な目的は
この世界における情報網の構築だ冒険者として実績を積みミスリルやオリハルコン最上級のアダマンタイトのプレート持ちとなれば
それに見合った仕事が回され得られる情報も有益な物へと変わるだろう」
炎「お金の方はゆかりさんがここエ・ランテルで稼いでいるが我々も仕事を見つけあ

る程度の情報を集める方がいいので仕事を見つけるぞ!!」
アイ「明日　早速組合の所へ向かうぞ」
ナ&パ『はっ!!』
アイ&炎『だからな、その体制をやめろ』
二人はナーベラル、パンドラの行動に悩むのであった

12話

タブラ、御建雷、ヘロヘロは人化の指輪を付け
装備を幻術で低いランクの装備に見せた
ソリュシャンを護衛として連れて　帝都の裏路地に来て
そこを歩いていた
ーバハルス帝国ー
？「あんあら、ワーカーかい？」
タブラ達に謎の女性がやって来た
タ「ええ、つい最近結成したばかりですが」
？「そうかい、私はワーカー達のチームに依頼を伝える仕事をしているイースさ、これを渡しておくよ」
イースは謎の水晶と本のしおりの用な鉄の板を渡した
ヘ「これは？」
イ「この水晶は依頼を伝えるアイテムさ、そしてこいつは何れだけの成績を持ってるか示されるアイテムさ

依頼を完了すると　これに依頼を完了した回数が刻んでもらえるのさ」
武「刻めるのは依頼した奴だけか？」
イ「そうだよ、早速　誰でも受けられる依頼があるんだがやるかい？」
ソ「!!!…」
へ「ソリュ落ち着いてください」
ヘロヘロはソリュシャンを押さえているので大丈夫そうだ
武「どうすんだタナトス？」
タ「……受けましょう」
イ「よし、決まりだ依頼内容はこれに書いてるよ　それじゃあ　私は行くよ」
イースは手紙を渡すと何処かに消えていった
タ「シャドウデーモン〈影の悪魔〉彼女の影に１人入っておきなさい」
影「はっ!!」
タブラの影から現れたシャドウデーモン〈影の悪魔〉は直ぐにイースの後を追った
武「ゆーさんからの資金もあるし宿でも探すか？」
タ「そうしましょう　ヘブンさんソリュは落ち着きましたか？」
へ「はい」
ソ「申し訳ありません!!」

ヘ「僕達は何も気にしていませんから」
とヘロヘロはソリュシャンの頭を撫で撫でした
ヘ「それでタナトスさん、裏路地に入る前に見つけた宿屋に行きますか？」
タ「そうですね、そこに行きましょう雷さんも良いですか？」
武「ああ、そこでいい」
タブラ達は早速　その宿屋に向かった
ー宿屋ー
中には宿主以外誰もいなかった
宿主「ん？あんたらワーカーかそれも成り立てのうちを拠点にしたいのか？」
武「ああ」
宿主「いいだろ、話し合いなら自分の部屋でやってくれよ　後４人用の部屋を使ってくれ金は１日分で銀貨１枚だ」
タ「分かりました」
ヘ「今日の分の銀貨１枚前払いしておきますね」
ヘロヘロは宿主に銀貨１枚を渡した
宿主「ああ、確かに部屋はこの宿の２階の一番奥だ」
宿主は階段の方に指を向けた

タブラ達は部屋へ入ると依頼が書かれた手紙を開けて内容を見てみた
武「人殺しの依頼だなそれも死体処理もやるのかよ」
へ（設定でもかいちゃったしなソリュシャン絶対その殺してもいい人間を食べたいと思ってるんだろうな）
「建御雷さん、それソリュシャンに任せていいですか?」
タ「設定ですね……ソリュシャン貴方にこの依頼を任せます、我々は手を出しませんその人間を食べてもいいですよ」
ソ「ありがとうございますタブラ様」
ソリュシャンは笑みを浮かべながらタブラに感謝した

この日の夜
最近ある屋敷の前をうろちょろしてた男の命は消えた

13話

ードブの大森林ー
ドブの大森林にぶくぶく茶釜とアウラ、マーレが来ていた
茶「さて、森の探索を始めるよ」
ア「はい!!ぶくぶく茶釜様!!」
マ「はっ、はい!!」
茶「じゃあ、早速　アウラ魔獣達を使ってくここから周囲……５ｋｍ　を調査して」
ア「はい!!フゥー」
アウラは指笛で自分の配下の魔獣達を呼び寄せぶくぶく茶釜が立っている位置から周囲５ｋｍの範囲を散策させるように命じた
茶「マーレ近くに生き物がいないか探して」
マ「はい!!ぶくぶく茶釜様!!ディテクト・ライフ〔生命感知〕」
とマーレが魔法で生命反応を探知した
マ「え、えっと東側に沢山の生命の反応がありました」
茶「ありがとマーレ」

ぶくぶく茶釜はマーレの頭を撫で撫でした
マ「へへ」
ア（いいなぁ、マーレ）
茶（可愛い!!!!やっぱり男の娘にして良かった!!!!）「じゃあそこに行こっかアウラ、マーレ」
ア＆マ『はい!!』
３人はマーレが行った沢山の生命の反応がある東側に向かった　そこには
茶「ゴブリンかぁ…アウラ追い払える？」
ア「お任せください!!ぶくぶく茶釜様!!」
アウラはゴブリン達を思いっきり睨んだらゴブリン達は逃げていった
茶「アウラもありがと」
ぶくぶく茶釜はアウラの頭も撫で撫でした
ア「えへへ」
茶「この森の探索は凄い規模になりそうね」
とぶくぶく茶釜はポツリと言った後
回りを見てみると見たことがない花が咲いていた
茶「採取しておいた方がいいね　アウラ、マーレ少しあの花を根っこごと抜いて採取

して」
ア&マ『はい!!』
二人は元気よく返事をするとお花つみを始めた
茶（録画のスクロールがあったはず!!）
ぶくぶく茶釜は急いでインフィニティ・ハヴァザック〔無限の背負い袋〕から録画のスクロールを取り出して
双子の可愛い花つみの姿を録画した
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
一方　場所が変わってナザリック大墳墓
ーアインズの寝室ー
コンコン　ガチャ
第7階層守護者デミウルゴスが入ってきた
アインズはエ・ランテルに行っているのに何故彼がここに来た理由は
デ「アルベド」
アル「?」
モモンガのベットに入って匂いを付けているアルベドに何故　至高の御方々のベットに入って匂いをつけているか聞きに来たからだ

デ「何故　毎日至高の御方々の寝室で何をしてるのかね？」
ア「至高の御方々がお戻りになった時、わたくしの香りで包んで差し上げようかと思って」
デ（至高の御方々はリング・オブ・サステナンスを付けているので睡眠が不要では）
「まぁ、ほどほどにね」
アル「？…どう言う意味か分からないけど分かったわねぇアインズ様」
アルベドはそっくりなアインズの抱き枕を起こした
デ「!!!!!それは……抱き枕ですか？」
アル「ええ自作よ!!他の至高の御方々のもあるわ更に将来生まれてくるであろう至高の御方々との赤ん坊の為の服をもぉ5歳まで編んでるわ!!」
デ「ぶくぶく茶釜様とゆかり様は無理なのでは？」
アル「そこは、愛の力（自分が両性）で何とかするわ」
デ「はぁー、そうですか」
デミウルゴスは今　興奮しているアルベドに呆れながら答えたのだった

14話

ー冒険者組合ー

モモンガと弐式炎雷が掲示板を見ていて後ろにはナーベラルとパンドラズアクターが控えていた

アイ〔読めないですね〕

炎〔そうですね〕

その時

？「すみません私達の仕事を手伝ってほしいのですがいいですか？」

ア「？」

と4人組のチームが声をかけてくれたので上の席で話す事にした

？「では改めてまして私が漆黒の剣のリーダーペテル・モークです

それで彼方がチームの耳であり目であるレンジャー〔野伏〕のルクルット・ボルフ」

ルク「はぁーい」

ペテ「そして治癒魔法や自然を操る魔法を使うドルイド〔森祭司〕ダイン・グッドワンダー」

ダイ「宜しくお願いする」
ペテ「そして最後にマジックキャスター〔魔法詠唱者〕でありチームの頭脳ニニャ・ザ・スペルキャスター」
ニニャ「宜しく、しかしペテルその恥ずかしい二つ名やめません？」
ペテ「えっ？いいじゃないですか」
ルク「こいつタレント〔生まれながらの異能〕持ちなんだ」
アイ「ほぉタレント〔生まれながらの異能〕持ち」
炎「へぇ」
ペテ「魔法適正てっ言うタレント〔生まれながらの異能〕で確か習熟を一般の人の半分になります」
アイ「それは凄い」
ニニャ「この能力を生まれ持っていた事は幸運でした夢を叶える第一歩が踏み出せたんですから」
ペテ「何はともあれこの都市では有名なタレント〔生まれながらの異能〕持ちです」
ニニャ「まぁ、私よりもっと有名な方がいますけどね」
ダイ「バレアレ氏であるな」
アイ「ほぉ、ああ此方はマジックキャスター〔魔法詠唱者〕のナーベ　そして彼方は

アーチャーのパンドラそして私の左隣にいるのがアサシンの炎雷そして私がモモンです。宜しくお願いします」
炎「宜しくお願いします」
その後少し仕事の事で話し合った後　下へ降りると受付嬢が
受付嬢「モモンさん」
アイ「ん？」
受付嬢「モモンさんにご指名の依頼が入っております」
アイ「一体どなたが？」
受付嬢「ンフィーレア・バレアレです」
と回りが騒がしくなってきた
そしたら指名して来たンフィーレアが此方にやって来たら
ナーベラルがンフィーレアに向かって剣を抜こうとしてたので急いで弐式が止めた
炎「ナーベ」
ナ「申し訳ありません」
炎「ナーベが俺達を守ろうと行動しているのは分かる、だけどもう少し自重した方がいい」
ンフィ「モモンさん僕が依頼させていただきました」

すると突然左手を少し上げた
アイ「大変申し訳ないんだが、私は別の仕事を受けた身なので」
ペテ「モモンさん名指しですよ!!」
アイ「嬉しいかも知れませんがそれでも先に依頼を受けた方を優先するのは当然でしょ」
ペテ「しかし、せっかくの指名を」
アイ「であればどうでしょうバレアレさんのお話を聞いてかは考えるという事は」
とアインズの提案にンフィーレアやペテル達も頷き先ほどいた席に戻った

15話

ー冒険者組合ー

ンフィ「僕はンフィーレア・バレアレこの街で薬師をしています。今回薬草採取の為にカルネ村近くの森まで行くつもりです」

アイ&炎（（カルネ村））

ンフィ「それでそこまでの警護と薬草採取の手伝いを依頼したいのです」

アイ「警護ですか？」

炎〔モモンガさん彼の警護は俺がやりますね俺のニンジャなら多少は守れるので〕

アイ〔はい、弐式さんお願いします後

アイアン〔鉄〕のチームが何れぐらいのチームワークや力を持ってるか確かましょう弐式さん」

炎〔分かりました〕

ンフィ「報酬は規定の…」

アイ「ペテルさん我々に雇われる気はありませんか？」

ペテ「と言うと？」

炎「警護任務となるとレンジャー〔野伏〕のルクルットさんが必要でしょう」
アイ「更に森での採取ならドルイド〔森祭司〕であるダインさんがいるべきだと効率が良くなるのではないでしょうか？」
ペテ「ありがたい申し出です!!」
ンフィ「僕の方もそれで問題ありません」
アイ「良かったでは最後に質問しても？」
ンフィ「はい」
アイ「何故私なのでしょうか？我々はここに来たばかりです。親しい友人もこの街にはいません
それなのに、何故？」
ンフィ「宿屋の一件を聞いたんですよ」
炎「あの絡んできた男達のことですか」
ンフィ「はい、あっという間に上のランクの冒険者をぶっ飛ばしたとお店に来ていた方に聞きまして
丁度いままで行かれた方が別の街に行かれたようで折角ですから新しい方にとそれにカッパー〔銅〕のプレートの方なら御安くすむと思いまして」
アイ「確かに」

ルク「そう言えば最近オリハンコンとかの装備の販売や1日2回だけ高額だか武器の魔法強化をしてくれる店があるよな確か名前は香りん堂てっ店主の名前はゆーだったはず」
ニニャ「ありますね、今度行ってみましょう」
アイ&炎（(絶対ゆかりさんだな)）
ペテ「我々の準備は出来ています」
ンフィ「では早速出発しましょう」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
次の日　アインズ達は街を出発してカルネ村に向かっていた
ンフィ「ペテルさん」
ペテ「はい？」
ンフィ「あの辺りで休憩しませんか？」
そこには川や休めそうな木がたっていた
ペテ「そうですねモモンさん炎雷さん」
アイ「分かりました」
炎「了解です」
そこで休憩することになった

ペテ「モモンさん炎雷さんここから先少し危険地帯にはいります」
アイ「了解しました」（さて何れだけ前衛として力を発揮できるか）
炎「注意しておきますね」（いざとなったら俺とナーベラルとパンドラで何とか出来るのか？一応人間の女の子のアーチャーの姿をコピーさせて変身してもらってるけど）
弐式が二人を目線だけで見ると二人は分かった様に頭を少し下げた
ルク「なぁーナーベちゃんパンドラちゃんそんなに心配することはねぇーてっ俺が耳であり目である限り問題ナッシングどうよ俺凄くない？」
ナ「このやぶかが」
パ「少々不快ですね」
アイ「パンドラ…」
炎「ナーベ…」
パ「…はい」
ナ「叩き潰す許可を貰えますか？モモンさん炎雷さん」
ルク「おー相変わらず厳しぃ」
ニニャ「確かこの辺りは森の賢王のテリトリーなんですよね」
アイ「森の賢王ですか？」
ンフィ「数百年の時を生きている強大な魔獣で蛇の尻尾を持つ白銀の四足獣と伝えら

れています叡知にあふれ魔法も使えるようですよ」

炎「ほぉ」

アイ「それは、会ってみたい者ですね」

とアインズは言うと空を見上げた

１６話

休憩を終えて再出発の準備をしている時にアインズはニニャからこの世界の事を聞いていた

炎〔何か凄い発展の仕方をしてますね〕

アイ〔魔法がそれほど文明に影響を与えたんでしょうね〕

ルクル「なぁーやっぱりモモンさんとナーベちゃんてっ恋人関係なの？」

ナ「こ、恋人!!何を言うのですか私なぞではなくアルベド様と言う方が!!」

アイ「おい、ちょま何言ゆ!!てるんだ」

炎「ナーベは私の嫁です!!!!」

アイ「炎雷さん!!!!　!!!!」

炎「あっ」

ナ「／／／／／／／／／／」

パ「ナーベさんナーベさん!!!!」

パンドラが顔を真っ赤にしているナーベの対応をしている間に

アイ「ルクルットさん詮索はやめてもらえませんか？」

ルク「あー失敬モモンさんには決まった相手がいてナーベちゃんは炎雷さんの嫁何ですねグスン（T^ T）」
ペテ「モモンガさん、炎雷さん仲間が申し訳ない他人の詮索は御法度だと言うのに」
アイ「いえいえ今後気を付けてくれるのなら水に流しますともですよね炎雷さん」
炎「はい」
ペテ「ルクルットお前もいい加減に」
その時ルクルットが右手を上げて
ルク「動いたな」
ペテ「何処だ？」
ルク「あれだよアレ」
ルクルットは森側に指を向けた
出てきたのは適当な装備を付けた大量のゴブリン達に
大量のオーガ達がいた
ルク「こりゃ戦闘は避けられないな」
ペテ「ンフィーレアさんはそのまま馬車に身を隠れていてください」
ンフィ「はい、宜しくお願いします」
ペテ「モモンさん炎雷さん分担はどうしましょう？」

アイ「皆さんにはンフィーレアさんの警護をお願いします
我々が容易くほふってみましょう」
ペテ「とは言え出来るだけの戦闘支援はさせて頂きますよ」
ニニャ「このまま戦闘を開始すると森に逃げられる可能性があるけど」
ルク「なら、何時も通りで行こうぜ亀の頭を引っ張り出す感じでな」
ダイ「それが良いのであるそれでペテル敵の突撃はモモン氏達がブロックするとして抜けてきた敵は？」
ペテ「オーガは武技要塞で私が押さえるゴブリンの足止めはダイン」
ダイ「承知したのである」
ペテ「ニニャは防御魔法を私にその後戦況を見つつ攻撃魔法に専念してほしい」
ニニャ「うん、了解」
ペテ「ルクルットはゴブリンを狩っていってくれ」
ルク「任しとけ」
ペテ「モモンさん達もよろしいですか？」
アイ「ええ」
ルク「まずは」
ルクルットは弓を一発飛ばしたが外れた

ルク「かかったな」
再度一発飛ばしてゴブリン一体を倒した
ニニャ「リーンフォース・アーマー〔鎧強化〕」
ニニャがペテルの鎧を強化して
ダイ「トワイン・プラント〔植物の絡みつき〕」
とダインが魔法でオーガの足止めをした後
とうとうアインズ達がやって来て
アインズはグレードソードを2本を抜き取りだし
弐式はクナイを何処からか取り出して
ナーベは2人の後で控え
パンドラは少し離れた所で弓を構えた
アイ「はぁぁぁあ!!!!」
アインズは一撃でオーガを横に真っ二つにして倒した
炎「ふん!!」
弐式はクナイを1本飛ばしてオーガの脳天を撃ち抜いて倒した
ルク「す、すげぇ」
ペテ「ミスリルどころかオリハンコン……いやまさかアダマンタイト!!?」

アイ「どうしたかかってこないのか？」
アインズの挑発にオーガ達は前進している
一方パンドラも弓を飛ばして一撃で多数のゴブリンを倒しまくっていて
抜けてきたゴブリンをペテル達が対応していた
アイ「いいパーティーだ互いの能力を知り連携がとれている」
炎「俺達程では無いですね!!」
その後もアインズはグレードソードで弐式はクナイでオーガ達を倒していった
そして逃走しようとしているゴブリンとオーガ達を
アイ「ナーべやれ」
ナ「はっ!!」
ナーベラルはジャンプしてゴブリンとオーガ達の行く手をはばんで
ナ「ライトニング〔雷撃〕」
ナーベラルの魔法でゴブリンとオーガ達の心臓らへんを貫き全滅した
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ダインは魔法でペテルとルクルットを癒して
何故かニニャはゴブリンやオーガの一部を袋に入れていた
アイ「何をしているんですか？」

ニニャ「倒したモンスターはこおやってパーツを組合に提出すると報酬がもらえるんです」
炎「クリスタルはドロップしないのか」
ニニャ「でも凄いですねモモンさん炎雷さん思ってもいませんでした」
そして日が暮れて夕食の時
アインズ達はペテル達とンフィーレアから離れた場所で食べる事にした
アイ〔リアルで食べたのよりずっと旨い!!!!〕
炎〔何これ旨すぎだろ!!!!〕「ナーベ、パンドラどうだ?」
ナ「不味いですね」
パ「モモンさん!!!!と炎雷さん!!!!が食べるのには!!!!相応しくない!!!!かと!!!!」
アイ&炎（ナザリックの料理はそんなに旨いのこれよりも?……マジか）
二人はナーベラルとパンドラズアクターの言葉に耳を疑ってしまった
ナザリックの料理とはどれ程旨いのだろうかと二人は思ってしまった
二人はナザリックに戻った時に料理長にフルコースを作ってもらおうと心に決めた
二人だった

１７話

アイテム達は村にやって来たらゴブリンに囲まれ武器を向けられたが
村人のエンリがやって来て警戒は解いてもらった
ー丘の上ー
アインズと弐式、パンドラ、ナーベラルは丘の上から弓の訓練をしている村人達を見ていた
炎「中々やるな」
ナ「左様ですか」
パ「左様ですか!!」
アイ（パンドラのオーバーリアクションは何とか出来ないのかはぁ…）「確かに驚くべき技術がないしかし、彼処にいるのは１０日時程前まで弓など使った事がない者達」
炎「そんな者達が連れ合いを子供を親を殺され二度とあのような事が起きないようにと気持ちが成した技だ」
アイ「それを称賛しないでどおする」
パ「流石モモンガさん!!!!炎雷さん!!!」

アイ「お前はオーバーリアクションを押さえろ」
パ「はい」
ナ「申し訳ございません、そこまで考えが至りませんでした」
ンフィ「モモンさん!!!」
ンフィーレアが此方にやって来た
アイ「私に何か用ですか？」
ンフィ「モモンさんは……モモンさんはアインズ・ウール・ゴウンさんなのでしょうか!?」
４人『!!!!』
ンフィ「ありがとうございましたゴウンさんこの村を救ってくださって」
アイ「違うとも私は」
ンフィ「あっはい、名前を隠されているのは何かあるのは分かっています。それでもこの村をいえ、エンリを助けてくれた事にお礼を言いたかったんです
僕の好きな人を助けてくれてありがとうございました!!!」
アイ「はぁ、頭を上げたまへ」
ンフィ「はい、ゴウンさんそれと実は隠していた事があるんです」
炎「ナーベ、パンドラ少しも外してくれるか」

ナ&パ『畏まりました』
ナーベラルとパンドラズアクターは離れていった
ンフィーレアは依頼をしてポーションの事を探ろうとしていた事を話した
アイ「成る程」
ンフィ「申し訳ございません!!!!」
炎「別に悪い事ではないでしょう」
アイ「今回の依頼はコレクション作りのいっかんと言うことだろう何が問題なんだ？
それに仮にポーションの作り方を知った場合それを君はどのように使う？」
ンフィ「あっ、そこまでは考えていませんでしたあくまでも知識欲のいっかんだったので」
アイ「そうか悪用する糸があったのならともかく
そうで無いのなら問題ない」
ンフィ「凄いですね、やはりエンリが憧れるだけの」
アイ「所で私がアインズだと知ってるのは君だけか？」
ンフィ「はい、誰にも言ってません」
アイ「そうか、それはありがたい今の私はモモンと言う一介の冒険者だそれを忘れないでくれれば嬉しいな」

ンフィ「はい、多分そうなんだろうなと思っていました

それでもエンリをこの村を救ってくださってありがとうございました!!!」

ンフィーレアはそう言うと丘を降りていって

ナーベラルとパンドラが戻ってきた

ナ「アインズ様、弐式炎雷様申し訳ありませんでした」

アイ「そうだな、お前がアルベドの名を出したせいだな」

ナ「この命で謝罪を!!」

ナーベラルが剣を抜いて自害しようとした時弐式が剣を止めた

アイ「よい!!!どんな者にも失敗はあるならば、その失敗を繰り返さぬよう努力すればよいお前のミスを全て許そうナーベラル・ガンマ」

炎「そうそう、ナーベラルは俺の大事な嫁何だから」

ナ「//////この上ない喜びです!!」

ナーベラルは顔を赤くしてそう言った

パ（これはデミウルゴスに相談しておかないとですね）

とパンドラは弐式の正姫はナーベラルになるだろうとデミウルゴスに報告することにした

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ードブの大森林ー
ンフィ「ではここから森に入りますので警護を宜しくお願いします」
ペテ「まぁモモンさんがいるなら大事だと思いますが」
ンフィ「あのモモンさん森の賢王が現れたなら殺さずに追い払ってくれませんか？」
ペテ「えっ？」
アイ「それは何故ですか？」
ンフィ「これまでカルネ村がモンスターに襲われなかったのは森の賢王この辺りを縄張りにしているからです
それを倒してみまわれますと」
ルク「いくら何でもそいつは無理だろ」
アイ「了解しました」
ルク「相手は何百年も生きてる魔獣だぞ!!?」
ダイ「強者のみに許された態度であるな」
アイ「それで一つ提案があるのですが？」
ンフィ「どうぞモモンさん」
アイ「ナーベがアラームに似た魔法を使えるので周囲を探索してみます」
炎「それに危険だったら私が伝えにくるので」

ンフィ「構いませんよ、でもあまり長く離れないでくださいね」
アイ「勿論ですとも」
とアインズは頷くとンフィーレア達と別れて行動を始めた

１８話

ードブの大森林ー
アインズ達は森の中を歩いていた
アイ「この辺りでいいな弐式」
炎「そうだな」
アイ「さぁ!!私と友の名を高める為の打ち合わせと行こうじゃないか!!」
？「了解　アインズさん」
？「はーい!!」
直ぐ様ナーベラルが反応して腕を声がした方に向けるとそこには
？「と言う事で私とぶくぶく茶釜様が来ました」
ナ「アウラ様驚かせないでください!!」
ア「ごめんね」
茶「パンドラズアクターは気付いていたみたいね、流石アインズさんが想像した人だな」
パ「光栄極まりないですぶくぶく茶釜様!!!!」

茶「じゃあ森の賢王を連れて来ますね。アウラ」
ア「はい!!」
アウラは小さくなったぶくぶく茶釜を抱えると森の賢王がいる所に向かった
アウラがぶくぶく茶釜を抱えながら走っていると急に後ろから持ち上げられモフモフとした所に落とされた
招待はアウラの魔獣のフェンだった
茶「フェン、クアドラシル久し振りだね」
ア「すみません、ぶくぶく茶釜様」
茶「うんうん、気にしてないからいいよアウラ多分心配して来てくれたんだから一緒に連れていってあげて」
ア「はい!!ぶくぶく茶釜様!!」
二匹も嬉しそうに声をあげた
そしてある洞窟まで行くとアウラはその中に入っていって獣を刺激させると
ア「お仕事終わり!!!!」
茶「じゃあ帰ろ!!」
と茶釜達はアインズがいる所へ向かった
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

アインズ達はンフィーレア達を逃がすと
炎「足の一本か尻尾でも持ち帰るか」
アイ「お客様のご登場だ」
アインズは背おっているグレードソード２本を抜いて手に持った
弐式はクナイと手裏剣を手に持って
パンドラズアクターは弓を構え
ナーベラルも剣を取り出した
尻尾の一撃がアインズに飛んできたがアインズはそれを跳ね返した
？「それがしの狙撃を防ぐとは見事でござる…」
炎「ござる？」
？「さてそれがしの縄張りへの侵入今逃走するのであれば先程の見事な防御に免じてそれがしは追わないでおくがどうするでござるか？」
アイ「愚問、それよりも姿を見せないのは自信がないのか？それとも恥ずかしがりやさんかな？」
？「言うではこざらぬか、ではそれがしのいように瞠目し畏怖するがよい」
のしのしと獣がやってきた
アイ「な、何という」

？「そのエルムのしたからでも驚愕しているのが伝わってくるでござるよ」
炎「一つ聞きたいんだけどお前の種族はジャンガリアンハムスターじゃないか？」
そこには巨大なハムスターがいた
？「何ともしやらそなたそれがしの同族を知っているのでござるか？」
アイ「ああ、多分な茶釜さんが昔飼っていたはずだ」
ナ＆パ『おお』
？「なんと同族がいるのであれば教えて欲しいでござる!!子孫を作らねば生物として失格でござるがゆえに」
炎「サイズ的に無理だろ」
？「そうでござるか残念でござる」
アイ「すまんな」
？「いいでござる、それよりもそろそろ無駄な話はよして命の奪い合いをするでござる!!」
アイ「期待したのにな」
炎「ですよね」
？「それがしの領地に侵入せし者よそれがしの糧となるでござる!!」
炎＆アイ『外れだな』

？「何をしているでござるか？まさかとは思うが今だ勝敗が分からぬうちに降伏とはあり得んでござろう
さぁそれがしと本気で戦うでござるよ命の奪い合いでござるよ!!」
アイ「もぉやめだ」
アインズは剣を森の賢王に向けて
アイ「スキル〔絶望のオーラレベルⅠ〕」
とアインズのスキルで森の賢王は震え上がって倒れた
？「降伏でござるそれがしの負けでござるよ」
アイ「はぁしょせんは獣か」
アウラが皮を剥ごうとしたけどアインズがペットにしたので皮は剥がれなかった
因みに名前はハム助に決まった
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
漆黒の剣&ンフィ『これが森の賢王!!』
何故か彼等やナーベラルやパンドラには絶賛の評価で
エ・ランテルに戻って行った

19話

ンフィーレアの祖母リイジー・バレアレと一緒に報酬を受け取りに店に来たら
アイ「厄介だな」
アインズと弐式は武器を取り出し奥へ向かった
そしたらそこには死んでいるペテル達がいた　留目はナイフで殺られた用だった
4人の処理をした色々と調べた後
炎「ナイフで殺れたみたいだな」
アイ「　持ち物が荒らされてない形跡からそいつはンフィーレアを拐うのが狙いだったんだろう」
リイ「ではこの者達は一体？」
炎「今回我々と一緒にお孫さんの依頼で同行していたチームの方です」
アイ「それよりもどう考える？」
リイ「？何がじゃ」
アイ「死体の処理をしない事からこの後何か大きい事をこの街でしでかすのではないか……だから依頼したらどうだ？」

リイ「なんじゃと？」
アイ「まさに冒険者に依頼すべき案件だろう」
炎「幸運だなリイジー・バレアレ我々こそ、この街の最高の冒険者でありこの案件を唯一解決出来るチームだ」
アイ「依頼するのであれば引き受けなくもない」
リイ「確かにお主らなら雇おうとも!!汝らを雇おう!!!!」
アイ「そうか、ただし高いぞ報酬の覚悟はしているな？」
リイ「いかほどなら満足してくれる？」
アイ「全てだ」
リイ「何!?」
アイ「お前の全てを差し出せ」
リイ「お主ら!!悪魔は人の魂を代価にどんな願いも叶えると言うがまさかとは思うがお主らは悪魔では!?」
炎「仮にそうでも孫を助けられるなら貴女は何でもするだろう？」
リイ「雇おう!!わしの持つ全てを差し出そう孫を救ってくれ!!」
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
その後　アイン達はスクロールを使いンフィーレアの居場所を探った

アイ「終わったぞ」
リイ「何か分かったのか？」
アイ「敵の潜伏地は墓地だ」
リイ「孫もそこに!?」
炎「リイジーこの話を多くの人や組合に伝えてくれアンデットが墓地の外に溢れ出たら厄介なことになる
封じ込めるには多くの人の協力が必要だろう？」
リイ「承知したじゃがお主らアンデットの軍勢を突破する手段を持っているのか？」
アイ＆ａｍｐ；炎（カッコよく）『ここにいるだろう』
と言い墓地へ向かった
ーーー

アイ「それが?この私モモンに何か関係があるのかね?まぁいい門を開けたくないと言うのであれば仕方がない」
炎「そうだな」
二人はジャンプて壁の向こうへ行った同様にナーベラル、パンドラも後ろから続いて向かった後ハム助も
そしてアインズと弐式、パンドラはアンデットを倒しながら向かっていた
因みにナーベラルはハム助をかつぎ飛びながら向かっていた
アイ「切りがないなパンドラズアクター能力を使いアンデット達を潰せ」
パ「畏まりましたモモンさん」
アインズはパンドラに任せて墳墓へ向かった
ナーベラルは大きな木上にハム助を乗せて地上に降りていた
そこには何やら儀式をやっている者達がいた
リーダーはカジットという者らしい
炎（馬鹿だな）
アイ「やぁ、良い夜だなカジットつまらない儀式をするには勿体無いじゃないか?」
カジ「ふん、儀式に適した夜かいなかはわしが決めるそれよりお主は一体何者だ?」
アイ「依頼を受けた冒険者でね、ある少年を探しているんだ名前は言わないでも…分

かるだろ？」
炎「それとお前達の中に、ナイフの武器を漏ってる奴がいるだろ」
？「ふぅーんあいつら、カジッちゃんが留目をさしちゃったんだ～」
カジ「お主」
？「それで、そちらさんのお名前を聞いてもいいかな？あっ、私はクレマンティーヌ…よろしくね」
アイ「聞いてもしょうがないが、私はモモンと言う」
炎「私は炎雷と言う」
クレ「んっ？そうかな……しかしどおやってここが分かったのさー？」
アイ「マントの下に答えがあるそれを見せてもらおう」
クレ「これのこと？」
とクレマンティーヌがマントのしたの物を見せた
アイ「それがお前の居場所を教えてくれたんだ」
クレ「ふーん」
アイ「ナーベ、炎雷」
ナ「はい」
炎「どうしたモモンさん？」

アイ「カジットを含めた、そこの男達の相手は任せた……私は、この女を相手にする」
ナ「畏まりました　炎雷様　お任せください」
炎「了解　　ナーベ上に注意しておけ」ポツリ
弐式はそう返事をした後ナーベラルに警告した
アイ「クレマンティーヌ私たちは、あちらで殺し合わないか？」
クレ「ｏｋ～」
と二人は遠くへ向かった
ナ「ツインマキシマイタジック　エレクトロスフィア〔二重最強変球・電撃球〕」
とナーベラルは二つの雷の珠をカジット達に向けて投げた
ーーー

ゆかり様は、私を気に入ったと言えば、分かってもらえると申しておりましたが？」
アイ（ゆかりさんかー　ならいいか）「ふむ、そうか……ではある程度時間がたつまで、私の相手をしろ」
クレ「畏まりました」
クレマンティーヌとアインズは戦闘を始めた
ーーー

２０話

ー墓地ー

ハム「助けて欲しいでござるーーーー!!!!」

パ「今助けますよ」

パンドラは遠距離からアンデット達を潰した

ーーー

を潰し倒した
カジ「何だと!!お主ら何者だ!!さてはミスリル……いやオリハルコンクラスの冒険者か!!」
ナ「そう興奮するから、こう言う言葉がお似合いなのよベニコメツキ」
カジ「き、貴様!!」
スケリトル・ドラゴン〔骨の竜〕は起き上がるが顔の部分がぽろぽろと骨が落ちていく
カジ「させん!!させん!!させんぞ!!レイ・オブ・ネガティブエナジー〔負の光線〕」
と魔法を使い急速　再生させた
カジ「リーンフォースアーマー〔鎧強化〕レッサー・ストレングス〔下級筋力増大〕シールドウォール〔盾壁〕アンデットフレイム〔死者の炎〕」
と立て続けにカジットはスケリトル・ドラゴン〔骨の竜〕を強化した
ナ「リーンフォースアーマー〔鎧強化〕シールドウォール〔盾壁〕プロテクションエナジー・ネガティブ〔負属性防御〕」
とナーベラルも防御魔法を立て続けにかける
２人の戦闘は続いている
ーーー

アイ「色々と勉強になるな」
クレ「指摘して悪いのですが本当に戦士ですか?身体能力は凄いけど動きが素人…すみませんつい素の口調が」
アイ「ふむ、そうか……私は魔力系のマジックキャスター〔魔法詠唱者〕エルダーリッチ〔死者の大魔法使い〕より上位の存在だ私だけの時ならぬ素の口調で構わん」
クレ「ありがとモモン様てっマジックキャスター〔魔法詠唱者〕!?ふぇー凄」
アイ「ナーベラル・ガンマ!!!ナザリックが威を示せ!!」
クレ「そろそろカジッちゃんが、潰されるって分けか…モモン様そろそろ私も本気で攻撃するよ?
アンデットてっ分かったから、あの方法でいいかなぁ」
クレマンティーヌは姿勢を低くした
アイ「ああ、来い」
ーーー

を開始します」
ナーベラルは攻撃を交わして冒険者の服を一瞬で脱いで一瞬でメイド服に変えた
ナ「喜びなさい人間風情が、ナザリック地下大墳墓の絶対なる支配者　至高の４１人に忠義を尽くす。プレアデス〔六連星〕が１人ナーベラル・ガンマにお相手をしてもらえるという事を」
カジ「メイド？やれスケリトル・ドラゴン〔骨の竜〕」
と攻撃させたが一瞬で姿を消しカジットの肩を刺してまた転移魔法で転移した
カジ「お主の切り札は、転移してわしを殺すということか!」
ナ「そんなわけないでしょ、こうやって殺すとも容易ですよ。という実演をしたまでよ」
カジ「狂っているのか!!?」
ナ「ノミとは言え、その答えは何？もう少し頭を使ってほしいわ……」
カジ「そろそろ終わりにしましょう、あまりアインズ様と弐式炎雷様をお待たせするのは配下の者として失礼…
スケリトル・ドラゴン〔骨の竜〕には魔法が効かないと思っているようなので、アメンボに知恵を得る機械を与えましょう。
お代はあなたの命ということで」

ナーベラルは手をパンと打ち合わせた音が響いて
離した両手の間には白い雷撃が弧を描いていた
カジ「なっ、何だその魔法は!!!!スケリトル・ドラゴン〔骨の竜〕には魔法への絶対耐性が!!!!」
ナ「絶対耐性？でもそれは第６位階以下の魔法の無効化と言う能力
つまり、それ以上の魔法が使用てわきる。このナーベラル・ガンマの攻撃は無効化出来ないと言うこと」
ガ「馬鹿な!!第７位階魔法を行使できる者などいない!!!!何故だ!!このわしが５年間かけて作り上げた努力の結晶が!!
この僅かな時間で崩壊すると言うのか!!」
ナ「アインズ様、弐式炎雷様の踏台本当にご苦労様…
ツインマキシマイタジック・チェイン・ドラゴン・ライトニング〔二重最強化・連鎖する龍雷〕!!!!」
とナーベラルの攻撃によってスケリトル・ドラゴン〔骨の竜〕は潰れカジットは黒焦げになった
ナ「虫けらでも、焼けるといい臭いがする…エントマへのお見上げにどうかな？」
弐式はナーベラルの影から出てきて

炎「ご苦労様ナーベラル、でもエントマは多分
焼けてないのが好きだと思うから、お土産には相応しくないな。」
弐式はナーベラルの頭を撫でた
ナ「さ、作用ですか…／／／」
ナーベラルは少し顔を赤くしていた。
ーーー

ハム「殿ーー!!殿ーー!!!!」
ハム助とパンドラズアクターがアインズの所へやって来た
ハム「うぉー!!!何か凄い化け!!」
と続きの言葉はナーベラルがハム助の上に着地したことで止まった
アイ「ナーベラル、パンドラズアクター、クレマンティーヌ他の冒険者が来る前に奴等の持ち物を回収しろ死体は改修するな
クレマンティーヌは新たにゆかりさんの僕となったからな」
ナ＆ａｍｐ；パ＆ａｍｐ；クレ『はっ!!』
アインズと弐式はンフィーレアを助けた後
アインズ鎧を来て　弐式はンフィーレアをかついで墳墓から出てきた
アイ「さぁ凱旋だ!!!」
炎「それでこのクレマンティーヌはどうするんだ？」
アイ「クレマンティーヌお前は香りん堂に行け」
クレ「畏まりました」
クレマンティーヌは香りん堂へ向かった
ーーー

アイ「オリハルコンになるかと思ったがこんな物か」
炎「そうだな」
その時　アインズと弐式にメッセージ〔伝言〕が来た
アルベド〔アインズ様!!!!弐式様!!!!大変です!!!!ゆかり様がペロロンチーノ様が!!!!アルトリウス様が!!!!〕
アイ＆ａｍｐ；炎『!?』

２１話

前日

ーエ・ランテルー黄金の輝き亭ー

そこには人化した

たっち・みーとセバスがいた

たっち「セバスそろそろ　別の街に移ろうザック君も準備しなさい」

ザック「へっ、へい」

ー部屋ー

たっち「準備は出来たシャルティアと橙とペロロンチーノさんとゆかりさんがいる馬車へ向かおう」

セ「畏まりました　たっち・みー様」

ーー

ー馬車の中ー

ゆ「今回はごめんなさいね。私も橙の能力を試したくて　、今回のペロロンチーノさんとシャルティアの武技集めを手伝わせてもらうわ」

ペ「俺は構わないですよ」
たっ「今回の獲物…私は手を出さない方が、いいですか？」
ペ「出来れば」
その時　馬車が止まって　ゆかりは橙を卸させてリーダーらしき男以外を皆殺しにした
ゆかり、ペロロンチーノ、シャルティア、セバス、たっち・みーは馬車から降りた
橙「ゆかり様　こいつらの拠点に、武技が使える奴がいますにゃ」
ゆ「じゃあ　向かいましょうか」
たっ「皆さんそろそろ私とセバスは王都に向かうので……また」
ペ「また、会いましょうたっちさん」
ゆ「ごきげんようたっちさん」
たっち・みーとセバスは馬車に乗ると王都に向かって出発した
ゆ「橙　猫の姿になって」
橙「はいですにゃゆかり様」
ゆかりは猫になった橙を右肩に乗せて右手でリーダーらしき男の首を持ち
ゆ「フライ〔飛行〕」
と浮遊して

ゆ「ペロロンチーノさん」
ペ「分かりました」
ペロロンチーノはシャルティアをお姫様抱っこして羽を動かし中に浮いた
シャ「はぁ／／／／／ペロロンチーノ様ー!!!!」
シャルティアはペロロンチーノの首に腕を回しペロロンチーノに抱き付いた
ゆ「こほん、ペロロンチーノさんやるんだったら後でお願いするわ」
ペ「……はい」
二人は彼等の拠点へ向かった
拠点への入ると橙が元の姿に戻って敵を殺し進んでいたら
謎の男がやって来たそして刀も持っている
？「あんたらが俺の部下たちを殺った奴か…」
ゆ「そうよ、でっどうするの？」
？「ただ、お返しにお前達をやるだけだ、俺は強さを求めて、こんな事をやってるんだからな…」
ゆ「気に入ったわ、交代よ」
橙「はいですにゃ」
ゆかりは交代した

？「ブレイン・アングラウスだ」
ゆ「私は八雲　ゆかり…宜しくね　刀には刀で答えましょう」
ゆかりはアイテムボックスから刀を2本取り出し傘をなおした
ブ「ほぉ、二刀流か」
ゆ「この刀の名は葉隠……さて、参るわ」
ブレインは何かの構えをした
ゆかりは葉隠を持ちゆっくり進んで　刀の結界の中に入ってきて飛んできたブレインの剣を簡単に葉隠で受け止めた
ゆ「さて」
ゆかりは一瞬でブレインの後ろへ来てブレインの首に葉隠を添えた
ゆ「あなたの負けね」
ブ「ぐっ…悔しいがな、殺せよ」
ゆ「ふふ、さて腕輪よ　この者を闇に染めわが　僕にしなさい」
ブ「何!?」
とゆかりが言うとゆかりの腕輪から黒い煙が出てブレインの全身を覆うと
ブ「ぐぁぁぁあ!!!!」
ペ「おお」

シャ「きれいでありんすね」
とブレインが叫んだ後
彼に狐の耳と狐の尻尾８っが生えた
ゆ「さて、ブレイン　貴方はこの私ゆかりに、私の友人達にナザリックにその身を捧げる？」
ブ「ああ、捧げる」
ゆ「ふふ、ようこそナザリックへブレインは藍の部下にしましょうさてブレイン他に仲間はいるかしら？」
ブ「奥にいると思われます　ゆかり様」
ペ「変わりようが凄いな　じゃあ後始末しに行くか」
とペロロンチーノ達は奥にいる元ブレインの仲間達を殺した後　外に出たら
冒険者チームが他の集団に殺されていたが１人だけ生き残っていて逃げていった
その集団は此方に標的を変えたらしい
橙、シャルティア、ブレインが降りて謎の集団と戦っていて残るのは謎の槍を持った男とチャイナ服をきた老婆に
そしてその男は老婆に
？「出てこい深淵の騎士！!!!!カイルやれ!!!!」

と槍を持った男が宝石を砕くと
ゆかりやペロロンチーノ、シャルティアが知っている奴が出てきた
ゆ＆ａｍｐ；ペ『アルトリさん!!!!』
シャ「アルトリウス様!?」
ブ「おい!!危ない…!!」
ブレインはシャルティアの背中に手を当てて押しだそうとし
更にカイルは謎の光をシャルティア達に放とうとしていたのをゆかりとペロロンチーノは見て
ペ（攻撃は間に合わない!!!!）「ゆかりさん!!!!」
ゆ「はい!!!!　変われ!!!!」
とゆかりがペロロンチーノの肩に手をおいてそう言うと
耳飾りと腕輪が光り
ペロロンチーノとゆかり
シャルティア、橙、ブレインが入れ替わった
そして何故かシャルティアにはゆかりの耳飾り
橙にはゆかりの腕輪が付いていた。
シャルティア達の目の前でゆかり、ペロロンチーノ、アルトリウスに謎の光りは貫通

した
がゆかりは貫通する前に葉隠を飛ばし男とカイルの脳天に突き刺し
３人は力を無くしたように動かなくなった
シャ「ペロロンチーノ様ーーーーー!!!!」
橙「ゆかり様ーーーーー!!!!」
が全く彼等は反応したない
橙「シャルティア様!!あの武器と服を回収して戻りましょうにゃ!!これはアイン様に!!!!」
シャ「くっ、分かったわ!!!!ブレイン回収しなさい!!!!」
ブ「お、おう」
ブレインは急いで武器や防具を回収して、シャルティアのゲート〔転移門〕に入ってナザリックに帰還した

22話

ー王座の間ー

ここには現在

アインズ、ウルベルト、たっち・みー、タブラ、ヘロヘロ、ぶくぶく茶釜、武人御建雷、弐式炎雷

アルベド、シャルティア、コキュートス、アウラ、マーレ、デミウルゴス、パンドラズアクター、藍、橙がいた

アイ&ウ『オール・アプレイサル・マジックアイテム〔道具上位鑑定〕』

アインズがチャイナ服をウルベルトが槍を鑑定した

アイ&ウ『何!!』

武「どうしたんだ?」

ウ「世界級アイテムだ、しかも二十の1ゆロンギヌス〔聖者殺しの槍〕だ」

ギルメン『ロンギヌス〔聖者殺しの槍〕!!!!!!』

驚きは更に続く

アイ「ゆかりさん、ペロロンチーノさん、アルトリウスさんが精神支配を受けた理由

が分かったこの服も世界級アイテムの領域鎖国だ能力はアンデット等でも精神支配可能にする能力だ」

『!!!』

!!!全員に驚愕が走った

アイ「バードマンキラーに妖怪殺しの妖刀そして弐式さんの武器も必要だ更に深淵の主の指輪も持って行った方が良いだろうな」

アル「まさかゆかり様、ペロロンチーノ様、アルトリウス様を……」

アイ「そうだ我々全員でうちに行く……お前達も来るのであろう?」

ＮＰＣ『勿論でございます!!!』

その時　扉が開いた　守護者達は構えたが

ウ「あいつらはアルトリウスさんが作ったＮＰＣのオーンスタイン、キアラン、ゴー他にも狼のシフに猫のアルヴィナがいる」

タ「オーンスタイン　深淵の主の指輪を持ってきました?」

オー「はい、タブラ様　ここに」

オーンスタインは手のひらの上にある深淵の主の指輪を見せた

アイ「まず、私と弐式さんが冒険者組合から依頼を受けてくるのでお前達はここで待機をしておけたっちさん達もいいな」

ＮＰＣ『はい、アインズ様』
ギルメン『分かった』
ーー
ー冒険者組合ー
アインザ「多忙なミスリルの君達が急な召集に応じてくれて感謝する。早速だが本題に入ろう
昨晩エ・ランテル近郊の森でアイアン〔鉄〕クラスの冒険者７人が謎の集団に遭遇し生き残った者以外の仲間をその集団に殺されたらしい、そして
その集団を全滅させたバンパイアと猫のようなモンスター　２体がいるらしい」
アイ〔間違いなくシャルティアと橙ですね〕
炎〔と言う事はペロロンチーノさんとゆかりさんが入れ替りアルトリウスさんが召喚されたのはその冒険者が逃げた後らしいですね〕
アインザ「バンパイアは対象を吸血することで絶対服従の配下に出来る奴等がエ・ランテルに入ったら一大事だ」
ベロ「まさか、共同墓地の事件と何か関係が？」
モッ「おお!!昨晩　モモンさんと弐式さんが解決したと言う」
イグ「あの程度の働きでミスリルとは羨ましい限りだ」

ベロ「おい、よさないか」
アインザ「昨晩での墓地の一件は首謀者の遺留品からズーラーノーンの仕業だと判明している」
ベロ「ズーラーノーンあのアンデットを使う秘密結社かならやはり、バンパイアと関係が？」
モッ「陽動かもしれん、だが判断するには情報が少な過ぎる」
イグ「アイアン〔鉄〕程度の強さではな」
アインザ「バンパイアと猫がいる付近に洞窟がある、そこを探ってみよう」
アイ「そのバンパイアと猫とズーラーノーンは関係がない」
アインザ「何か知っているのかね？」
炎「そのバンパイアの名はレッドキルンだ」
ミスリル冒険者＆アインザック『!!!!!!』
アインザ「そのレッドキルンと言う名を何故君達が知っている」
アイ「そのモンスターとは少々因縁があってね
この街に来た理由もレッドキルンを追ってきたからだ
我々のチームが行きましょう　もし、その場にいたのなら我々が滅ぼす」
ミスリル冒険者『!!!!!!』

イグ「何いってんだ!!!!そんなバカな」
アインザ「自信はあるのかね？」
炎「切り札はある」
と弐式が言うとアインズがマントの中から水晶を取り出し机に置いた
アイ「この魔封じの水晶には第８位階の魔法が込められている」
ミスリル冒険者＆アインザック『第８位階!!!』
アインザ「第８位階神話の領域ではないか!!!!」
それもそうだ人は第６位階までしか使えないのだから
イグ「下らない!!嘘に決まっている!!!」
アイ「鑑定に出してもいいがそんな時間は無いはずだ」
アインザ「報酬は？」
アイ「その話は後でただし、最低でもオリハルコンは約束して欲しい」
イグ「オリハルコン!?」
炎「一々力を証明するのは手間がかかるからだ」
アインズは魔封じの水晶をなおした
アインザ「成る程」
イグ「俺のチームも行く!!」

アイ「足手まといはいらない」
イグ「お前みたいな新参者を信用できるか!!!!大体そのバンパイアが強いかどうかも不明ではないか!!」
モッ「よせ、イグヴァルジ」
ベロ「さっきからその態度は無いだろう!!」
アイ「構わないさただ付いてきたら確実に死ぬぞ」
アインズはイグヴァルジに右目を光らせながらそう言い放った
ーーー

ナーベラル、ハム助が無駄な抵抗をするイグヴァルジを見ていた
アイ「私は警告した、だがお前はそれを無視した甘んじて受け入れろ」
とアインズがグレードソードで留めをさした
アイ「ハム助　お前はナザリックに戻っておけゲート〔転移門〕これは私の書斎に繋がっている。書斎から絶対に出るなよ」
ハム「はいでござる!!殿!!」
ハム助はゲート〔転移門〕に入って行ったゲート〔転移門〕が消えた後
アイ「では、向かうぞ」
とアインズ達はゆかり、ペロロンチーノ、アルトリウスがいる場所へと向かった
ーーー

炎「始めに超位魔法を打っておくか?」
と彼等が話しているのを聞きながらＮＰＣ達はこんな事を招いた下等生物達を容易くは殺さんと心に誓った
アイ「着いたか」
そこには、何もしなく立っているゆかり、ペロロンチーノ、アルトリウスがいた

23話

アイ「お前達は下がっていろ」
ＮＰＣ『はっ!!!!』
ＮＰＣ達が下がった事を確認すると
アインズ達はスキル、魔法で強化や防御等々を強くしていった
そしてアインズはゆかりの暗黒の腕輪を付けた
アイ「ウルベルトさん、タブラさんいいですか？」
ウ「はい」
タ「ええ」
アイ「ペロロンチーノさん、アルトリウスさん、ゆかりさん　最初から容赦無しだ」
アインズとウルベルトとタブラは超位魔法を展開し
たっち達も武器を構えた
アイ＆ウ＆タ『超位魔法フォールンダウン〔失堕する天空〕!!』
と３人の超位魔法を叩き込んだ
そこにはとても大きく何かに削り取られた後が残っていた

３人ともＨＰを１０分の３か４まで削られた
ゆ＆アルト＆ペ『殺す!!!!』
ゆかりはダークブラッド用の戦闘服に変えた
そして両手には夜刀神・終夜にジークスフリートを持っていて
アルトリウスは深淵の大剣を持っていた
ペロロンチーノはゲイ・ボウを構えていた
ゆ「マナ・エッセンス〔魔力の精髄〕あらあら、モモンガさん私のアイテム使ってるのね厄介だわ」
アルトリウスは素早くアインズ達に近づこうとしたが直ぐにたっち・みーが防ぎ
炎「〔足殺し〕」
弐式はスキルを使いアルトリウスの移動速度を殺した
アルト「ちっ!!〔深淵歩き〕」
アルトリウスの周りが突如黒くなった　たっち・みーは直ぐに下がった
ヘ「チェイン・ドラゴン・ライトニング〔連鎖する龍雷〕」
とヘロヘロが攻撃魔法を放ったが〔深淵歩き〕の効果で黒くなってる所なら直ぐに動けるのでアルトリウスはヘロヘロの攻撃を交わした
ペロロンチーノは弓でゆかりを攻撃しているアインズやタブラ、ウルベルトに攻撃す

るが姉のぶくぶく茶釜によって防がれてしまう
武「おらぁ!!!」
武人御建雷がバードマン特効の武器で攻撃してくるので一々交わさないと行けないので中々攻撃出来ない
ゆかりは弾幕を出してアインズ、タブラ、ウルベルトを攻撃しているが
３人とも魔法防御が高いし
大きくダージが来る弾幕で仲間が攻撃されそうになったら防御魔法をかけて来るので厄介だ
ゆ「ちっ!!『深弾幕結界ー夢幻泡影』!!!!!!」
ゆかりを中心にしウロコ弾がゆかりに向いて時計回りに展開していっている
そして展開し終わるとゆかりめがけて飛んでいったがゆかりをすり抜けてアインズ達に飛んできた
茶「〔ウォーズ・オブ・ジュリコ〕!!!」
茶釜がスキルを使いアインズ達を守った
ペロロンチーノは飛んでアルトリウスはジャンプして交わした
更にゆかりのスペカの能力は続いていて弾幕の連続攻撃だ
途中からウロコ弾から札の弾幕に変わりサラに威力はアップした

アイ「マキシマイズマジック・リアリティスラッシュ〔魔法最強化・現断〕」
アインズはゆかりに向けて魔法を放ち
ゆかりの左腕は飛んだ
ゆ「ぐっ!!」
ウ「マキシマイズマジック・アスノラル・スマイト〔魔法最強化・星幽界の一撃〕」
とウルベルトの魔法でアルトリウスは爆発したがスキルを使いある程度だが再生したけど　ボロボロだ
アルト「うーー」
タ「マキシマイズマジック・ヴァーミリオンノヴァ〔魔法最強化・朱の新星〕」
とペロロンチーノはタブラの攻撃で大ダメージを受け　血を吐いていた
ペ「げほっ!!」
炎「せい!!」
武「アチャラナーター〔不動明王撃〕」
アルト「避けられない!!」
たっ「せい!!」
ペ「くっそ!!!」
その隙に弐式と建御雷とたっち・ちーが攻撃して　攻撃させる隙を作らず

ゆ「ちっ食らえ!!!!」
ゆかりはアインズが超位魔法を使おうとしてたのをきずき
ジークスフリートの攻撃をしたが
茶「〔イージス〕」
へ「ウォール・オブ・スライム〔スライムの壁〕」
ぶくぶく茶釜とヘロヘロは防御のスキルと魔法を使って防がれた
ウ&タ『マキシマイズマジック〔魔法最強化〕』
ウルベルトとタブラはアインズに魔法強化の魔法をかけた
アイ「さらばだ、フォールンダウン〔失墜する天空〕」
アインズの超位魔法が3人に直撃し死ぬ少し前に3人は自我を取り戻し
ゆ「……ありが、と」
ペ「ご面倒姉ちゃん、皆さ…」
アルト「私は……」
と言葉を残した後
3人はアインズの超位魔法によって消滅した
ーーー

玉座の間きはアインズ、ウルベルト、たっち・みー、タブラ、ヘロヘロ、ぶくぶく茶釜、武人御建雷、式式炎雷
アルベド、シャルティア、コキュートス、アウラ、マーレ、デミウルゴス、パンドラズアクター、藍、橙、オーンスタイン、キアラン、ゴー、プレアデス〔六連星〕
クレマンティーヌ、ニグン、ブレインがいた
アイ「では、これよりアルトリウスさん、ペロロンチーノさん、八雲　ゆかりさんの復活に入る
オーンスタイン　アルトリウスさんが復活したら直ぐに指輪を付けろ　そして不番な動きをした時は直ぐに捕らえるのだ!!!」
ギルメン『了解ギルマス』
ＮＰＣ＋ニ＋クレ＋ブレ『畏まりました』
アイ「ペロロンチーノよ、ゆかりよ、アルトリウスよ復活せよ!!!!!」
アインズの声に答えるように金貨１６億枚は３っに分かれ集まったそして１っはバードマンの形となり、１っには深淵の塊が４５個が入り人の姿になって、もう１っには紫の炎……魂が３０個が入り人形となった
ペロロンチーノ、アルトリウス、ゆかりが復活した
アインズは直ぐ様３人に黒い布を被せた

オーンスタインが直ぐにアルトリウスに深淵主の指輪を付けたら
3人はゆっくりと瞳を開け起き上がった
ペ「……姉ちゃん何で俺　裸なんだ　まぁこれこれで…」
茶「黙れ馬鹿弟」
ペ「すみません」
ゆ「……誰か説明してくれないかしら？何でそれより服をくれないかしら」
アルト「うん、モモンガさんか皆さん説明して欲しいんですが？」
へ「はい、実は…」
ギルメン（（絶対ペロロンチーノさんにゆかりさんアルトリウスさんだな……良かった））
黄金時代の装備に着替えた3人はアインズからの説明により
アルト&ゆ&ペ『すまなかった!!!／ごめんなさい!!!』
とアインズ達とアルベド達に謝った
守護者達は直ぐに慌ててそれを止めた
アインズはこんな光景を見て安心した
デ「所でアインズ様　今だナザリックに戻らないセバスは？」
たっ「セバスと私は囮となる　敵のスレイン法国が狙うとしたら一緒に馬車に乗って

いた私とセバスだ」
ＮＰＣ『!!!』
アイ「セバスの周りを極秘裏に監視する僕を選抜しろ」
アル「はっ!!」
アイ「セバスとたっちさんは囮だが絶対に食いつかせない」
タ「敵が近づいたら確実に阻止するのです」
ウ「スレイン法国にはいつかこの仮を返す」
炎「相手の事を全て調べきるまで我慢だ」
武「今は耐えるだけしか無理だな」
マ「あの、アインズ様あの森の戦闘後は僕が修復しておいた方が」
アイ「それは、必要ない」
マ「えっ？」
アイ「魔封じの水晶を破壊すると膨大な力が暴走して周囲一帯を破壊するらしいぞ」
マ「ええ!!そうなんですか？」
茶「マーレ冗談だよ、アインズさんマーレをからかわないでよ」
アイ「早急にナザリックの強化計画に入る」
この後　アルベドはアインズにリザードマンを滅ぼす事を提案した